

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 619 集

さばら
佐原Ⅱ遺跡発掘調査報告書

北部環状線道路改良事業関連遺跡発掘調査

2013

宮古市

(公財)岩手県文化振興事業団

佐原Ⅱ遺跡発掘調査報告書

北部環状線道路改良事業関連遺跡発掘調査

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を越す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターでは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、北部環状線道路改良事業に関連して、平成21～23年度に発掘調査された宮古市佐原Ⅱ遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査により佐原Ⅱ遺跡では、弥生時代の竪穴住居跡・土坑・焼土などが検出され弥生時代初頭の貴重な資料を得ることができました。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました宮古市をはじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

平成25年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例 言

1. 本報告書は岩手県宮古市佐原3丁目20番1ほかに所在する佐原Ⅱ遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
2. 本遺跡の調査は、北部環状線道路改良事業に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と宮古市都市整備部建設課との協議を経て、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
3. 岩手県遺跡台帳に登録される佐原Ⅱ遺跡の遺跡番号と遺跡略号は次のとおりである。
遺跡番号 L G 24 - 1082、遺跡略号 S B Ⅱ - 09・10・11
4. 発掘調査の期間・調査面積・担当者は次のとおりである。
平成21年度：7月6日～10月9日、1,300㎡、杉沢昭太郎・菅野 梢
平成22年度：11月15日～11月25日、329㎡、杉沢昭太郎・北田 勲・菅野 梢
平成23年度：11月1日～11月18日、330㎡、杉沢昭太郎・佐藤あゆみ
5. 室内整理の期間・担当者は次のとおりである。
整理期間：平成21年11月16日～平成21年12月31日、整理担当者：杉沢昭太郎
平成22年2月15日～平成22年3月15日、整理担当者：杉沢昭太郎
平成23年12月16日～平成24年1月15日、整理担当者：杉沢昭太郎
6. 野外調査における基準点測量にあたっては次の機関に委託した。
基準点測量：株式会社鈴木測量設計
7. 遺物の分析・鑑定にあたっては次の機関に委託した。
石材鑑定：花崗岩研究会（代表矢内桂三）、放射性炭素年代測定：(株)加速器分析研究所、
8. 発掘・整理・報告にあたっては次の方々に御指導・ご協力いただいた（順不同・敬称略）。
竹下将男・高橋憲太郎・鎌田祐二・加納由美・安原 誠・長谷川真・阿部 豊（宮古市教育委員会）宮古地区行政組合
9. 本報告書の執筆は、Ⅰ章 調査に至る経過は、宮古市都市整備部建設課に原稿を依頼した。Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅵ章は杉沢、Ⅴ章は(株)加速器分析研究所が行った。
10. 本遺跡の調査成果は、先に『平成21年度発掘調査報告書』（岩文振第524集）『平成22年度発掘調査報告書』（岩文振第588集）、『平成23年度発掘調査報告書』（岩文振第603集）に発表しているが、本書の内容が優先するものである。
11. 本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。

目 次

I	調査に至る経過	1
II	立地と環境	2
	1 遺跡の位置と立地	2
	2 歴史的環境	2
	3 基本層序	3
III	調査・整理の方法	7
	1 野外調査	7
	2 室内整理	8
IV	検出された遺構と遺物	15
	1 検出遺構	15
	2 出土遺物	18
V	自然科学的分析	32
VI	総括	35
	報告書抄録	55

表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	6
第2表	焼土観察表	17
第3表	土器類観察表	30
第4表	陶磁器観察表	31
第5表	石器類観察表	31

図版目次

第1図	岩手県全図、遺跡位置図	1	第11図	1・2号竪穴住居跡	21
第2図	地形分類図	4	第12図	土坑、陥し穴、焼土(1)	22
第3図	周辺の遺跡分布図	5	第13図	焼土(2)	23
第4図	遺構配置図1	10	第14図	沢跡	24
第5図	遺構配置図2	11	第15図	出土遺物(1)	25
第6図	遺構配置図3	12	第16図	出土遺物(2)	26
第7図	遺構配置図4	13	第17図	出土遺物(3)	27
第8図	基本土層図	14	第18図	出土遺物(4)	28
第9図	1号竪穴住居跡	19	第19図	出土遺物(5)	29
第10図	2号竪穴住居跡	20	第20図	弥生土器に付着したスス・コゲ	37

写真図版目次

写真図版1	遺跡全景	41	写真図版8	2号竪穴住居跡(2)	48
写真図版2	調査区現況	42	写真図版9	土坑、陥し穴	49
写真図版3	調査状況	43	写真図版10	焼土ほか	50
写真図版4	北側調査区 沢跡1	44	写真図版11	出土遺物(1)ほか	51
写真図版5	北側調査区 沢跡2	45	写真図版12	出土遺物(2)	52
写真図版6	1号竪穴住居跡(1)	46	写真図版13	出土遺物(3)	53
写真図版7	1号竪穴住居跡(2)、 2号竪穴住居跡(1)	47	写真図版14	出土遺物(4)	54

I 調査に至る経過

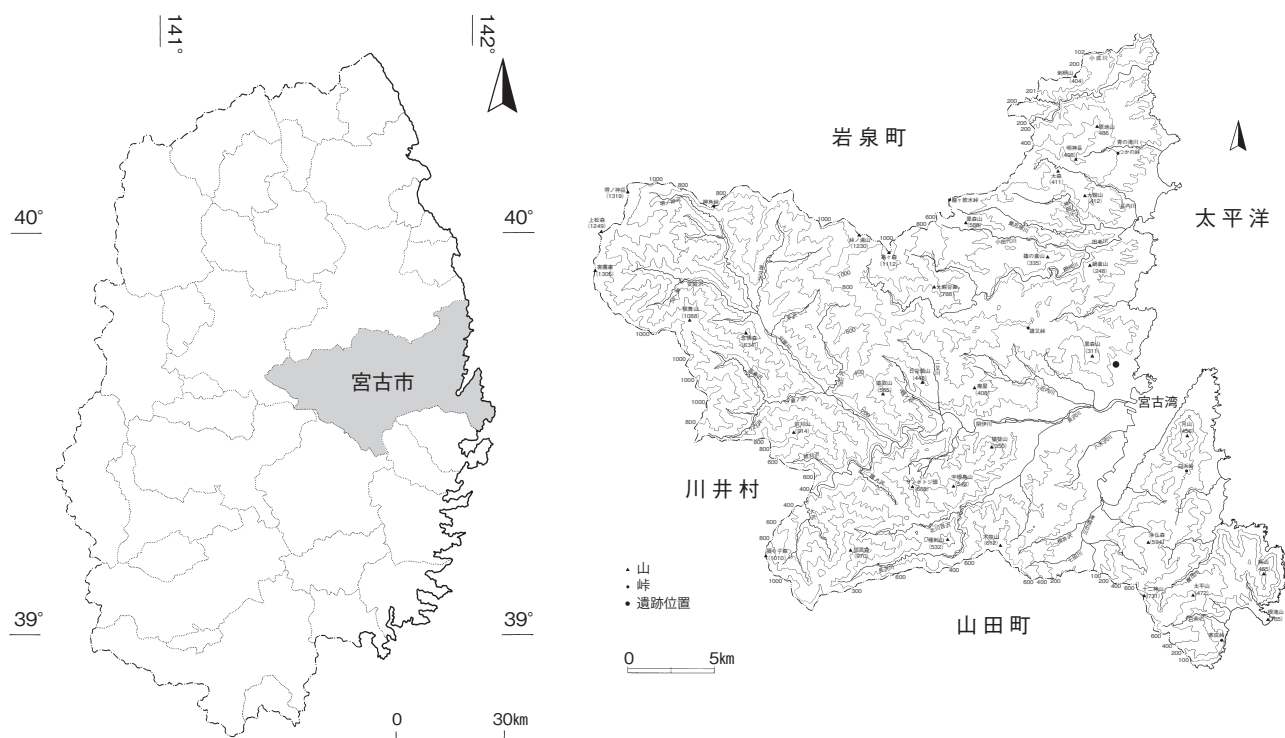
市道北部環状線の子定地内にある佐原Ⅱ遺跡は、佐原遺跡の西、日の出町Ⅰ遺跡の北方向に位置し、東西に伸びる二つの尾根に挟まれた傾斜地と平坦地からなり、平成20年度の試掘調査により、縄文時代を中心とする遺物が確認され、工事施工前に1,959㎡の発掘調査が必要となった。

その後、平成21年度に1,300㎡及び平成22年度に329㎡の発掘調査を行い、竪穴住居跡や縄文土器等の遺構・遺物を検出していた。しかし、用地未買収箇所が330㎡あり、すべての調査を終えることができなかった。

隣接地から竪穴住居跡の一部が検出されており、隣接地から用地未買収箇所へ続く遺構があるため、発掘調査が必要である。

今回、用地修得が完了したことから、330㎡の調査を依頼するものである。

(宮古市都市整備部建設課)



第1図 岩手県全図、遺跡位置図

Ⅱ 立地と環境

1 遺跡の位置と立地

佐原Ⅱ遺跡は、JR 東日本山田線宮古駅の北北東 2 km 付近に位置する。本遺跡は南西から北東に下る緩斜面を中心に小規模な尾根部とその間の沢部も含んでいる。範囲は東西 50 m、南北 140 m である。標高は 103 ～ 112 m を測る。調査前は山林および雑種地である。遺跡の中央部は北緯 39° 39′ 21″、東経 141° 57′ 07″ 付近にある。

遺跡の所在する宮古市は岩手県の最東端に位置し、東側には三陸海岸を擁して太平洋を臨み、西側には早池峰山を最高峰とする山々が連なる、北上山地中部の東側縁辺部の一端をなしている。平成 17 年に行われた合併により、北側に隣接していた田老町、西側に隣接していた新里村が、それぞれ宮古市と合併した。また平成 22 年には川井村とも合併し、これによって宮古市は北西を下閉伊郡岩泉町、西を盛岡市、南方を遠野市、下閉伊郡山田町と境界を接することとなった（平成 24 年 2 月 1 日現在、市域面積 1259.89km²、推計人口 57,865 人）。宮古市周辺の海岸には、浄土ヶ浜をはじめとする三陸海岸の景勝地が数多く存在するが、その海岸線は宮古市付近を境に南部と北部とで様相を異にする。釜石市を中心とした南部は湾と岬が入り組んだリアス式海岸であるのに対し、北部は海岸段丘の発達した比較的出入りの少ない隆起性の海岸線となる。所々には、高さ 100 m を超える海蝕崖が続いている箇所も見られる。

宮古市を流れる河川は、盛岡市と宮古市川井地区の境界にあたる区界峠付近に源を発する閉伊川、その支流の市街地を流れる近内川、長沢川、山口川、宮古湾に注ぐ津軽石川などがそれぞれの低地を形成している。地質的には東西を二分する津軽石川を境に様相が異なっており、西側は大半が中生代白亜紀前期の宮古花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母花崗閃緑岩～トータル岩で占められ、磁鉄鉱が含まれる。それに対し東側は、中生代白亜紀前期の大浦花崗岩と呼ばれる角閃石黒雲母アダムロ岩やデイサイト質火砕岩、泥岩などが堆積している。低地は、河川流域沿いの狭小な範囲に限定される傾向が見られる。標高 100 m 以下の丘陵地はこの低地周辺や海岸に沿って見られ、閉伊川の北側においては板屋付近から東に山地と低地に囲まれるように帯状に延び、南側では長沢川との合流地点や磯鶏西側の低地と山地の間に分布する。山地は丘陵地の背後に広がるが、起伏量が比較的少ない標高 300 m 以下の中起伏山地あるいは標高 200 m 以下の小起伏山地である。

遺跡は東流する閉伊川の流域には位置せず、東流して直接太平洋に注ぐ小規模な沢によって形成された小起伏山地にできた僅かな緩斜面に立地する。

2 歴史的環境

遺跡の所在する宮古市には多くの遺跡が確認されている。本節では旧宮古市域を中心に確認されている遺跡の分布状況を示し、遺跡周辺における歴史的環境について時代毎に概観する。

縄文・弥生時代

当地域における人々の活動が考古学的に確認できるのは、現段階では縄文時代早期からとされ、菅ノ沢遺跡、小沢貝塚、八木沢駒込Ⅰ遺跡などが確認されている。早期の土器が確認されている遺跡や散布地はその他にもあるが、現段階では総じて詳細な様相が把握できる状況にはな

い。縄文時代前期に入ると遺跡の数は増加傾向となり、中期ではさらにその数を増す。該期の遺跡としては宮古市指定史跡磯鶏蝦夷森貝塚や上村貝塚などが確認されている。両遺跡とも遺存状態良好な貝塚であり、特に人骨を始めとする有機質遺物に恵まれている。また、国指定史跡崎山貝塚は、縄文時代中期の集落や前期～中期の貝塚、遺物包含層などが確認されている。弥生時代では、上村貝塚において前期の集落が確認されており、金浜Ⅰ遺跡、木戸井内Ⅲ遺跡、隠里Ⅷ遺跡では、後期の土器が出土している。佐原Ⅱ遺跡は弥生時代初頭に位置付けられると考えている。

奈良・平安時代

奈良時代の遺跡では、長根Ⅰ遺跡の群集墳が調査されている。この遺跡では、蕨手刀や直刀など鉄製武器類や和同開珎が出土している。県内における和同開珎の出土例は少なく、律令制下で下閉伊地域を治める有力者の墓域であると考えられる。平安時代の遺跡は前代に比べると増加傾向にある。特に、集落跡において鉄生産に関連する遺構や遺物が認められる例が多く、9世紀以降に当地域で鉄生産が本格的に始まったと考えられる。特に、地質上花崗岩地帯に分類される地域においては製鉄関連の遺跡が顕著である。JR 宮古駅の北東2.5kmに位置する島田Ⅱ遺跡は、岩手県内屈指の平安時代鉄生産関連遺跡であることが発掘調査により明らかになっている。特に製鉄、精錬、鍛錬の各工程を読み取ることができる遺構と工房跡など内容が充実している。このことは、当地域において製錬から鉄製品の加工までの一連の生産が、盛んに行われていたことを物語る例として重要である。このほか、平成19年度に発掘調査が行われた隠里Ⅲ遺跡では平安時代の竪穴住居4棟とともに、住居状遺構9棟（鍛冶工房含む）、炭窯2基、火葬関連施設1基などが発見され、このうち竪穴住居、火葬関連施設から、沿岸北部では出土事例の稀な灰釉陶器片が出土している。

中世・近世

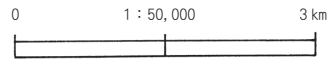
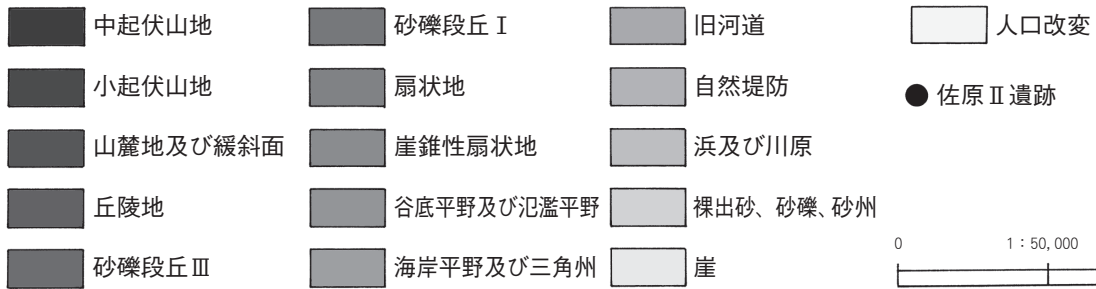
中世では、城館跡が多く確認・調査されている。これら中世の城館跡は、旧宮古市域において広範囲に点在し、それぞれ防衛的施設を有し、おもに閉伊氏・一戸千徳氏などの氏族が関係しているとされている。代表的なものとして磯鶏館山、松山館、千徳城、田鎖館、花輪館、鱒沢館などが確認されている。また、前代から引き続き、鉄生産に関連する遺構・遺物が認められる遺跡も多くあり、城館跡とセットで確認される例もある。近年、調査された山口館跡は城館跡であるとともに鍛冶工房や製鉄関連遺構が検出されている。また、黒森町遺跡では、鉄鋳物師関連も確認されている。

地域的・歴史的特性

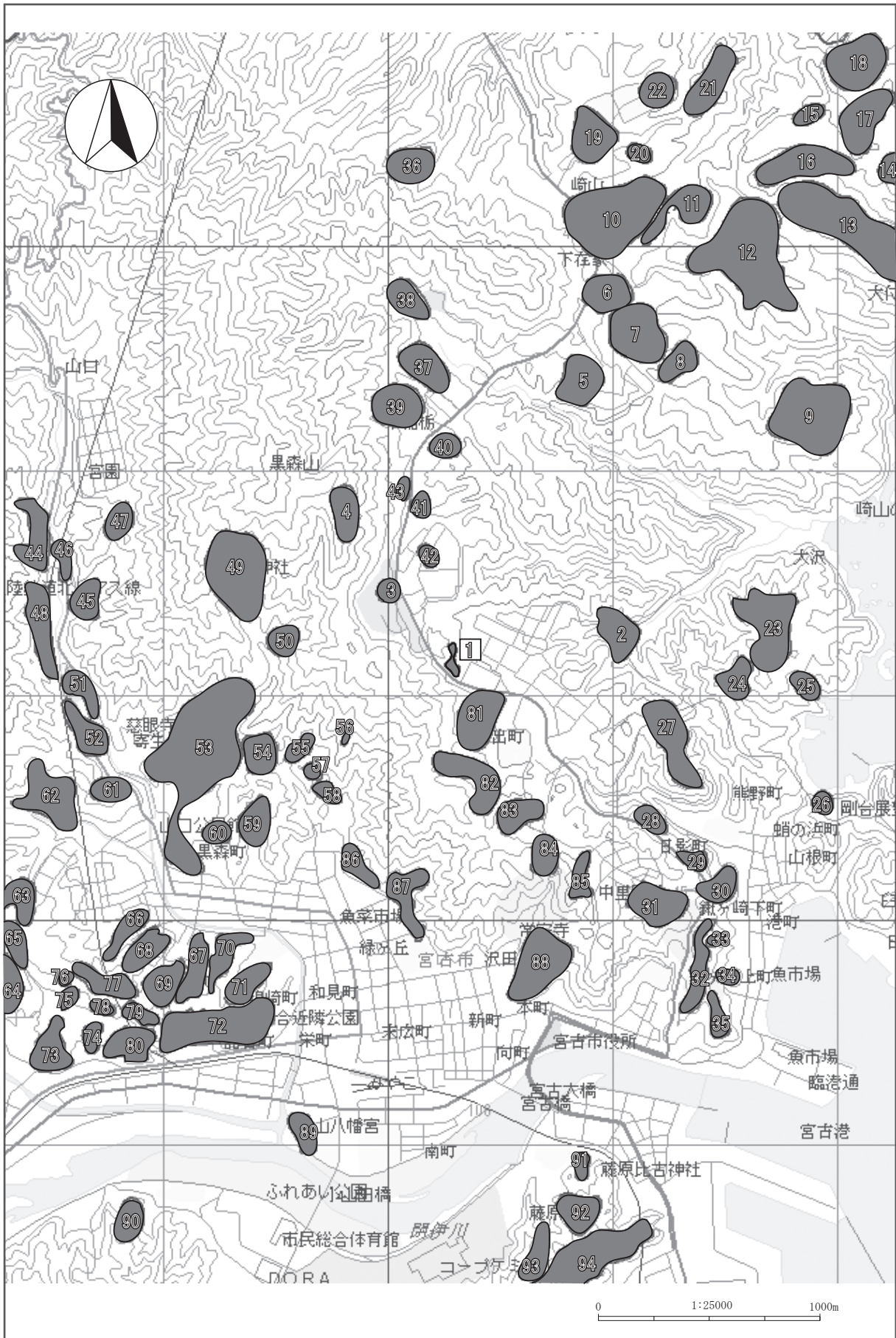
以上のように、佐原Ⅱ遺跡周辺には、縄文時代～中近世に至るまでの遺跡が数多く確認、調査されている。縄文時代においては、前期～後期の集落が多く、また沿岸地域という立地的特性から貝塚が多く確認されている。貝塚は有機質の遺物の残存状態が良好な場合が多く、貴重な情報を提供することが多い。したがって、縄文時代の海に関する生業や食生活を復元する有益な資料である。古代以降は鉄生産に関連する遺跡が多く確認されていることが特筆すべき事項である。これは花崗岩地帯に起因して、原料である砂鉄を多く産出する地域であるためであると考えられる。

3 基本層序

層序が最も良好な状態で残っている南側調査区で記録をとった。遺構検出面はⅧ層を基本とし、Ⅵ層の上面、下面他でも適宜行った（第8図）。



第2図 地形分類図



第3図 周辺の遺跡分布図

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	ふりがな	種別	時代	内容	所在地
1	佐原Ⅱ	さばらⅡ	散布地	縄文・奈良・平安・近世	縄文土器(前期・中期・後期)、石器、土師器、鉄滓、陶磁器	佐原3丁目
2	佐原	さばら	集落跡	縄文	縄文土器	佐原
3	寒風	さむかぜ	集落跡	縄文・古代	竪穴住居跡、土壌	崎嶽ヶ崎第1地割寒風
4	黒森	くろもり	散布地			山口第4地割田の神前
5	大石	おおいし	散布地	縄文	縄文土器	崎嶽ヶ崎第9地割大石
6	下在家Ⅰ	しもざいけⅠ	散布地	縄文	縄文土器(中期)	崎嶽ヶ崎第11地割下在家
7	下在家Ⅱ	しもざいけⅡ	散布地		貝層、釣り針	崎嶽ヶ崎第11地割下在家
8	塚場	つかば	散布地	縄文	縄文土器(後期)	崎嶽ヶ崎第10地割塚場
9	長磯	ながいそ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	崎嶽ヶ崎第12地割長磯
10	白石	しろいし	集落跡	縄文	竪穴住居跡、土壌、貝類	崎嶽ヶ崎第13地割白石
11	大付遺跡	おおづけいせき	集落跡・貝塚	縄文・弥生	竪穴住居跡、墓塚、貝層、人骨	崎嶽ヶ崎第15地割大付
12	早稲栃糠森	わせとちぬかもり	散布地	縄文	縄文土器(早・前・中期)	崎嶽ヶ崎第6地割糠森
13	早稲栃Ⅱ	わせとちⅡ	散布地	縄文	土壌、石囲炉	崎嶽ヶ崎第7地割鬼越
14	早稲栃Ⅲ	わせとちⅢ	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)、竪穴住居跡	崎嶽ヶ崎第5地割南沢
15	早稲栃Ⅳ	わせとちⅣ	散布地			崎嶽ヶ崎第8地割大澤
16	早稲栃Ⅴ	わせとちⅤ	散布地	縄文		崎嶽ヶ崎第4地割早稲栃
17	早稲栃Ⅵ	わせとちⅥ	散布地	縄文	縄文土器(中期)	崎嶽ヶ崎第4地割早稲栃
18	南沢Ⅰ	みなみざわⅠ	散布地			崎嶽ヶ崎第5地割南沢
19	黒森山	くろもりさん	寺院跡		勾玉	山口第4地割田の神前
20	黒森マギ沢	くろもりまぎさわ	散布地	縄文	縄文土器(早期)	山口第4地割田の神前
21	山口館(館山)	やまぐちたて	城館跡	中世・古代	主郭、副郭、二の郭、三の郭、空堀、土師器	山口第5地割久保、第10地割橋場
22	熊野町	くまのちょう	番屋跡?	中世	竪穴住居跡、青磁、茶臼	熊野町
23	平松Ⅰ	ひらまつⅠ	集落跡	縄文	縄文土器(前・中期)	嶽ヶ崎第6地割平松
24	平松Ⅱ	ひらまつⅡ	散布地	縄文	縄文土器(前・中期)	嶽ヶ崎第6地割平松
25	平松Ⅲ	ひらまつⅢ	散布地	縄文	縄文土器(中期)	崎嶽ヶ崎第6地割平松
26	井戸ヶ洞	いどがほら	集落跡	縄文	縄文土器	蛸の浜町
27	日の出町Ⅰ	ひのでちょうⅠ	散布地	縄文	縄文土器(早・前・中期)、竪穴住居跡・土坑・炉跡	日の出町
28	日の出町Ⅱ	ひのでちょうⅡ	散布地	縄文	縄文土器(中期)、羽口	日の出町
29	日の出町Ⅲ	ひのでちょうⅢ	散布地	縄文	縄文土器	日の出町
30	小山根	こやまね	散布地	縄文・弥生・古代	縄文土器、弥生土器、土師器	中里団地、愛宕一丁目
31	沢田Ⅰ	さわだⅠ	散布地	古代	土師器	沢田
32	沢田Ⅱ	さわだⅡ	散布地			沢田
33	日影町Ⅰ	ひかげちょうⅠ	散布地	縄文	縄文土器(晩期)	日影町
34	日影町Ⅱ	ひかげちょうⅡ	散布地			日影町
35	嶽ヶ崎館(館山)	くわがさきたて	城館跡	中世	腰郭、空堀	嶽ヶ崎下町
36	嶽ヶ崎仲町	くわがさきなかまち	散布地	縄文	縄文土器	嶽ヶ崎仲町
37	嶽ヶ崎上町	くわがさきかみまち	散布地	縄文	縄文土器	嶽ヶ崎上町
38	夏保	なつぼ	散布地	縄文	縄文土器	嶽ヶ崎第1地割夏保
39	光岸地	こうがんぢ	集落跡・貝塚	縄文	縄文土器(晩期)	光岸地
40	拝殿峠	はいでんとうげ	集落跡	縄文	縄文土器(後期)	山口第4地割田ノ神前、第3地割中谷地
41	拝殿ヶ沢	はいでんがさわ	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器、鉄滓	西町四丁目
42	黒森町Ⅰ	くろもりちょうⅠ	屋敷跡・鑄造遺跡	近世	陶磁器、鑄造炉、墓塚	黒森町
43	小沢Ⅴ神竜石	こざわⅤかごいし	散布地・祭祀跡	縄文・古代	縄文土器(晩期)、土師器、土偶	小沢二丁目
44	小沢Ⅵ	こざわⅥ	集落跡	縄文	縄文土器(中期)	小沢2丁目6地内
45	小沢Ⅳ人形鼻	こざわⅣにがはな	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器、須恵器	小沢二丁目
46	小沢Ⅲ石倉平	こざわⅢいしくらだいら	散布地	縄文	縄文土器(中・後期)	小沢二丁目
47	小沢貝塚	こざわかいづか	貝塚	縄文	縄文土器、貝層	小沢二丁目
48	小沢Ⅱ大上	こざわⅡおおうえ	散布地	縄文	縄文土器	小沢一丁目
49	黒田館	くろたたて	城館跡	中世	主郭、二の郭、三の郭、空堀	本町、沢田
50	泉町狐崎Ⅰ	いずみちょうきつねざきⅠ	散布地	古代	土師器	山口第6地割狐崎、泉町
51	泉町狐崎Ⅱ	いずみちょうきつねざきⅡ	集落跡	縄文・奈良・平安	縄文土器、土師器、竪穴住居跡	山口第6地割狐崎、泉町
52	泉町狐崎Ⅲ	いずみちょうきつねざきⅢ	散布地			山口第6地割狐崎、泉町
53	鴨崎Ⅰ	かもざきⅠ	集落跡	古代	土師器	鴨崎町
54	鴨崎Ⅱ	かもざきⅡ	散布地	古代	土師器、須恵器	鴨崎町
55	笠間館	かさまたて	城館跡	中世	郭、腰郭、砦	千徳第1地割猫ヶ沢、館合町
56	横山	よこやま	集落跡・貝塚	古代	土師器、須恵器、鉄滓	宮町二丁目
57	藤原上町Ⅰ	ふじわらかみまちⅠ	散布地	縄文・古代	縄文土器(前期)、須恵器	藤原上町
58	藤原上町Ⅱ	ふじわらかみまちⅡ	集落跡	奈良	竪穴住居跡	藤原上町
59	藤原上町Ⅲ	ふじわらかみまちⅢ	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	藤原上町
60	磯鶏石崎	そけいいしざき	散布地	縄文・古代	縄文土器、土師器	磯鶏第1地割石崎

Ⅲ 調査・整理の方法

1 野外調査

(1) 調査区の設定と遺構の命名

調査区の地区割にあたっては、平面直角座標（第X系：世界測地系）に合わせた基準点・補点をもとにしている。後述する試掘成果に従い調査区を3地点に絞ったため、それぞれを「北側調査区」「西側調査区」「南側調査区」とした。グリッド設定は行っていない。基準点・補点の座標は世界測地系であり、座標値は以下のとおりである。

基準点1	X = - 37605.000	Y = 96007.000	H = 112.678 m
基準点2	X = - 37548.000	Y = 95984.000	H = 105.862 m
補点1	X = - 37574.000	Y = 95991.000	H = 108.542 m
補点2	X = - 37544.000	Y = 95996.000	H = 105.097 m
補点3	X = - 37484.000	Y = 95984.000	H = 103.003 m
補点4	X = - 37468.000	Y = 95984.000	H = 101.950 m

この基準点と補点を基準として遺跡の地形測量。検出された遺構・遺物の実測を行った。

(2) 遺構の名称

検出された遺構の名称は、遺構の種類に応じてアルファベットで略号化はしなかった。検出順にそれぞれ番号を付けて、1号竪穴住居跡、2号竪穴住居跡、1号焼土、2号焼土…のように命名した。精査の過程や終了後に検討した結果、遺構ではないと判断したものや、遺構の種類を変更した番号もある。これらについては、変更後の番号で掲載している。

(3) 試掘・粗掘と遺構検出

当初、幅1～2m、長さ5～10mのトレンチを地形に応じて任意の場所に入れ、土層の堆積状況を把握した。試掘溝の設定にあたっては、試掘調査の成果を考慮しながら、試掘を行った。試掘の結果、斜面地で遺構・遺物が存在する可能性が低いと判断された区域は、試掘調査のみで調査を終えている。それ以外の区域においては、試掘にもとづいて表土掘削を行った。調査区全体の表土の厚さは20～30cm程あり、包含する遺物はほとんどないことを確認し、重機により表土除去を行った。遺構検出は人力で行った。遺構の検出は、斜面及び緩斜面部ではⅧ層黄褐色土層で行い、部分的にⅥ層中礫火山灰層の上面、下面でも行った。谷部では堆積土の色調が変わったところでその都度行い、最後にⅧ層で行った。

(4) 精査

検出された遺構は、原則として竪穴住居跡など大形の遺構の場合は4分法、土坑類は2分法で行った。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。

遺構内出土の遺物は、覆土で可能な限り分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則として調査区ごとに出土した層位を記して取り

上げ、適宜、写真撮影・図面作成を行った。

また、現場での記録作成では、上記の図面・写真以外にField・Card（以下F・Cと略す）を使用して、遺跡の調査経過や遺構の精査の進捗状況を記録している。

（５）実測・写真撮影

平面実測には電子平板を使用した。断面図の縮尺は竪穴住居跡・土坑類・沢跡は1/20を基本として、マイラー用紙に記録した。レベルは、基準高をもとに絶対高で測った。

写真撮影はモノクローム6×9cm判1台、デジタルカメラ1台（1000万画素以上）を使用して調査員が行った。撮影に際しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを使用した。実際の撮影は各遺構の覆土堆積状況、掘り上げ状況、遺物の出土状況などについて行っている。

（６）土層注記

断面図作成後に土層注記を行った。観察項目は、色調・土性・締まり・混入物などである。基本的には『新版標準土色帳』（1990年版、小山正忠・竹原秀雄編・著）をもとに行っているが、締まりは、密・やや密・中・やや疎・疎、の5段階で判断した。個々の遺構の覆土堆積状況は、自然か人為かの判断と、埋没している土の起源を把握することを課題とした。層名は調査区内に見られる基本的な土層をローマ数字（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）、遺構内覆土をアラビア数字（1・2・3）で表した。層位の細分の必要が生じた場合は、小文字のアルファベットを付し、I a・I b・1 c・・・などと表わした。

（７）土壌水洗

竪穴住居跡・炉跡では、動物遺存体が存在する可能性を考慮し、覆土下位（床上3cm）の覆土、竪穴住居跡の炉跡の覆土及び焼土・カマドの覆土及び焼土を採取し、水洗い・天日での乾燥・篩（5mm・3mm・1mm）による仕分けを行った。この工程を経て得られた遺物には、土器・石器の細片や炭粒などがある。

2 室内整理

期間内で、得られた遺物・実測図・写真などの整理を行った。野外調査で得られた遺物、実測図、写真などの各種資料は室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を行った。

（１）遺構に関わる記録

実測図は遺構ごとに分類し、電子平板で測量したデータについては、現場で入手した情報をそのまま保存することとした。これとは別に電子平板のデータは、手実測で記録した実測図をデジタルトレースしたものと合成して掲載できる体裁に整えた。

撮影されたフィルムはネガアルバムに密着写真と一組にして収納した。カラーライドフィルムはライドファイルに撮影順に収納した。

（２）遺物の整理

遺物は野外及び当センター整理室で水洗した後、細片は別として、出土地点・層位等を登録した遺

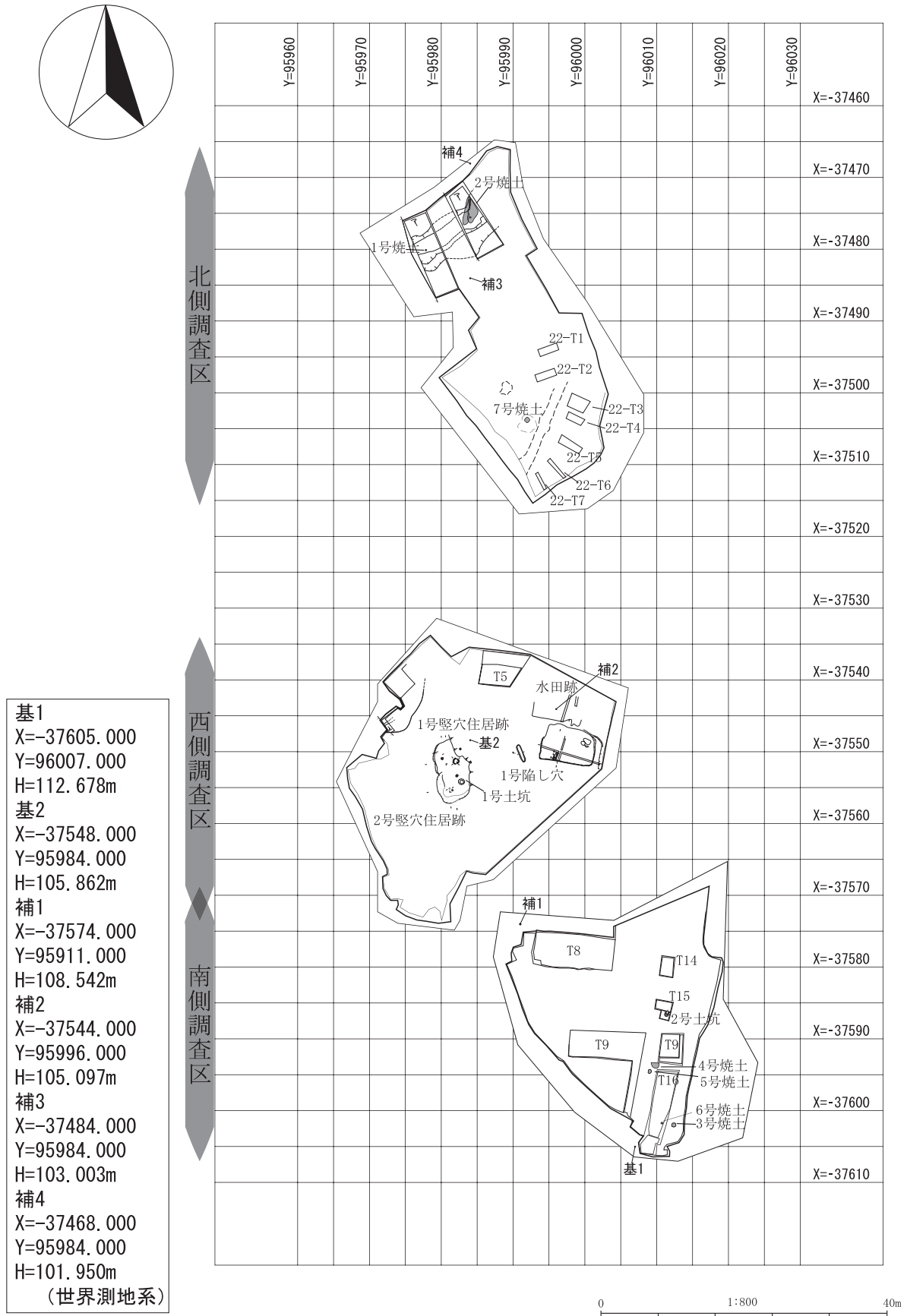
物Noを全破片に注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、接合・復元作業を行った。遺物の実測図・トレースは実大とした。石材・放射性炭素年代測定などの分析は外部の専門家に委託した。遺物の写真撮影はセンター内の専門技師1名が行った。

(3) 遺物の選別・図化の基準

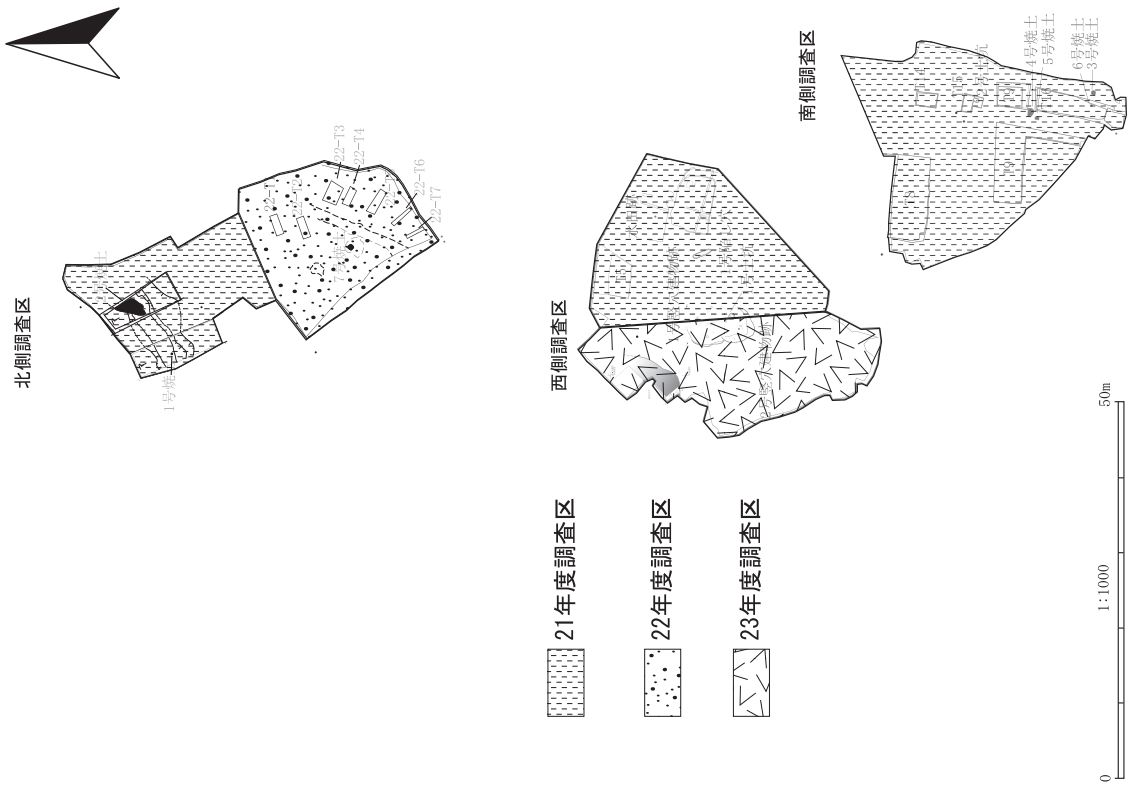
遺物の整理・報告にあたっての作業・記録作成は以下の方針で進めた。報告書に掲載された遺物は出土した遺物のすべてではなく、本遺跡を代表するもの、出土資料全体の傾向を把握できるものを調査・整理担当者が選別し、図化したものである。遺物は其々に分類、計測、計量、特徴の観察などを行い遺物台帳にまとめた。これを基に、報告書では遺物観察表を掲載した。



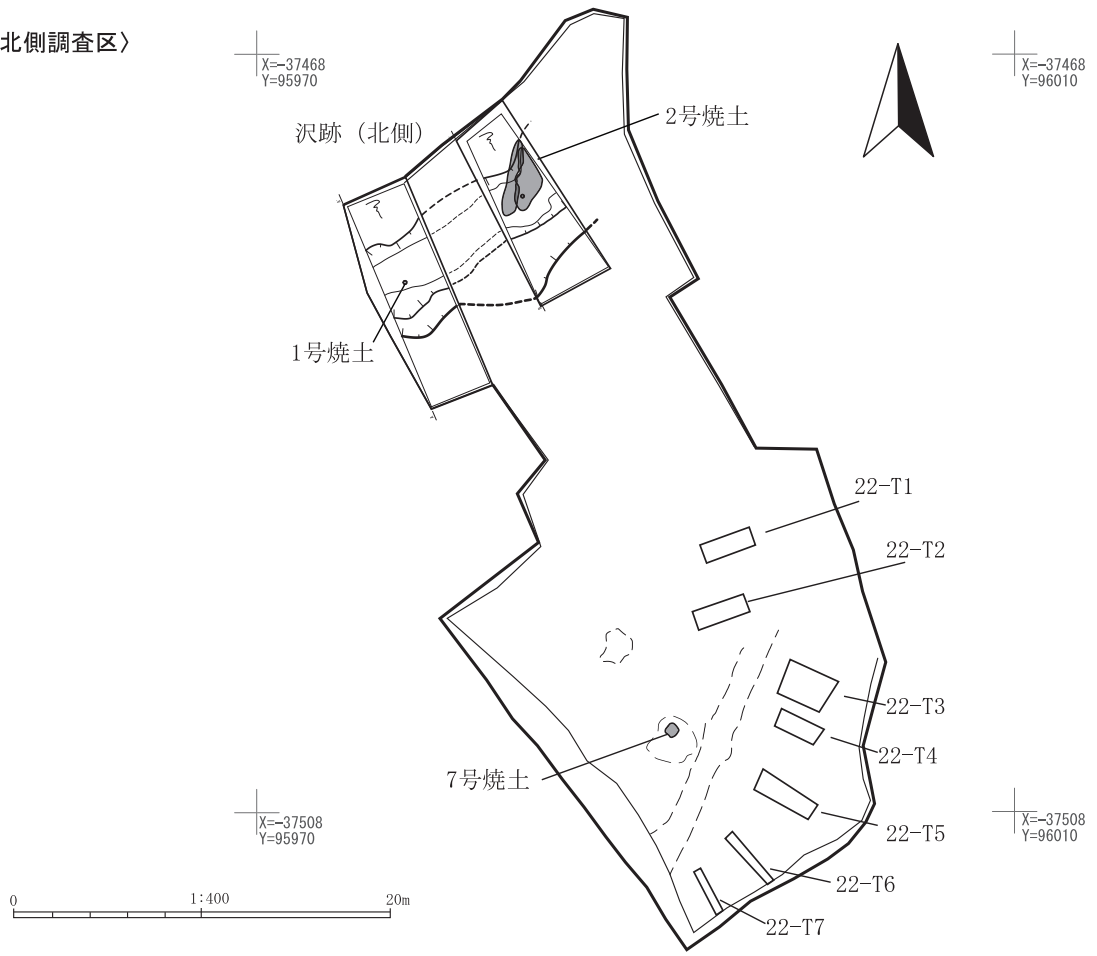
第4図 遺構配置図1



第5図 遺構配置図2

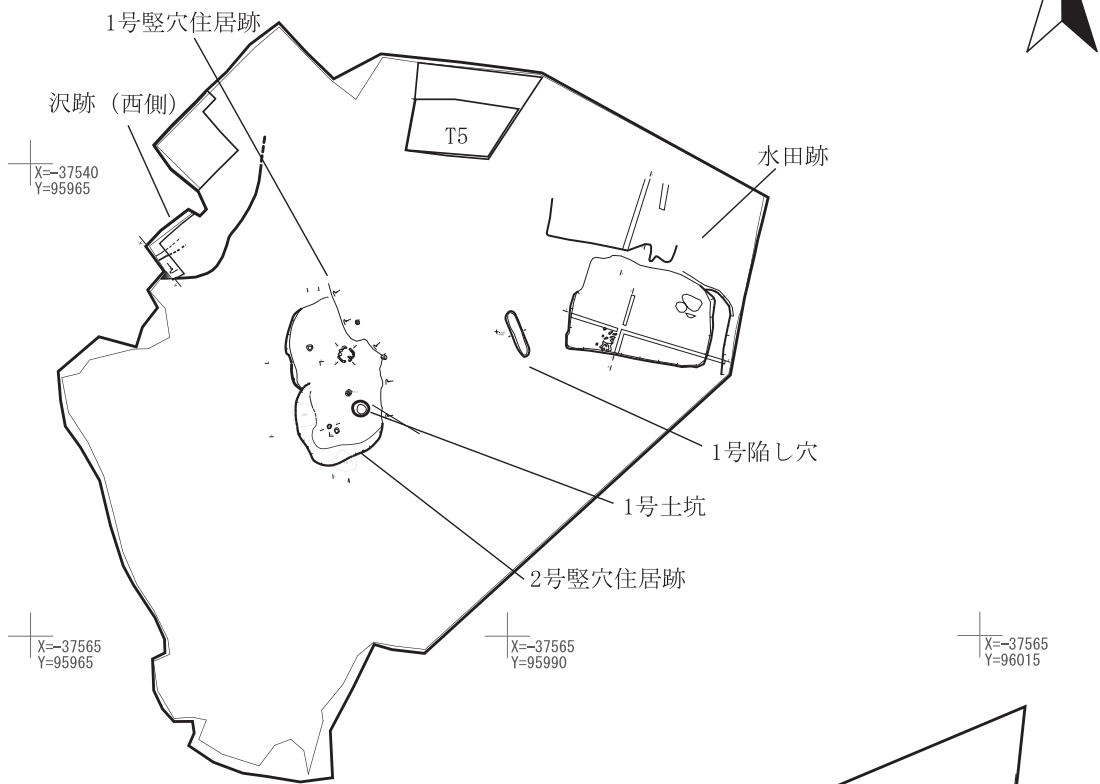


〈北側調査区〉

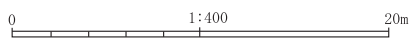
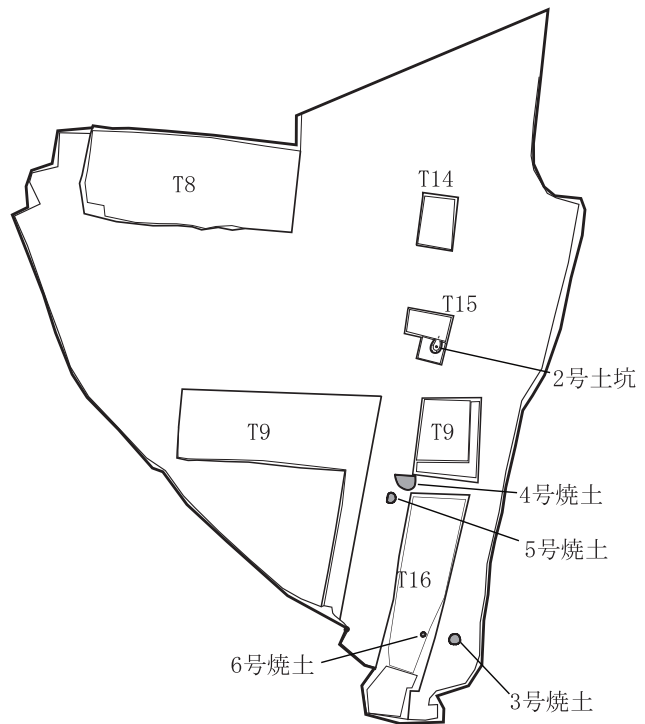


第6図 遺構配置図3

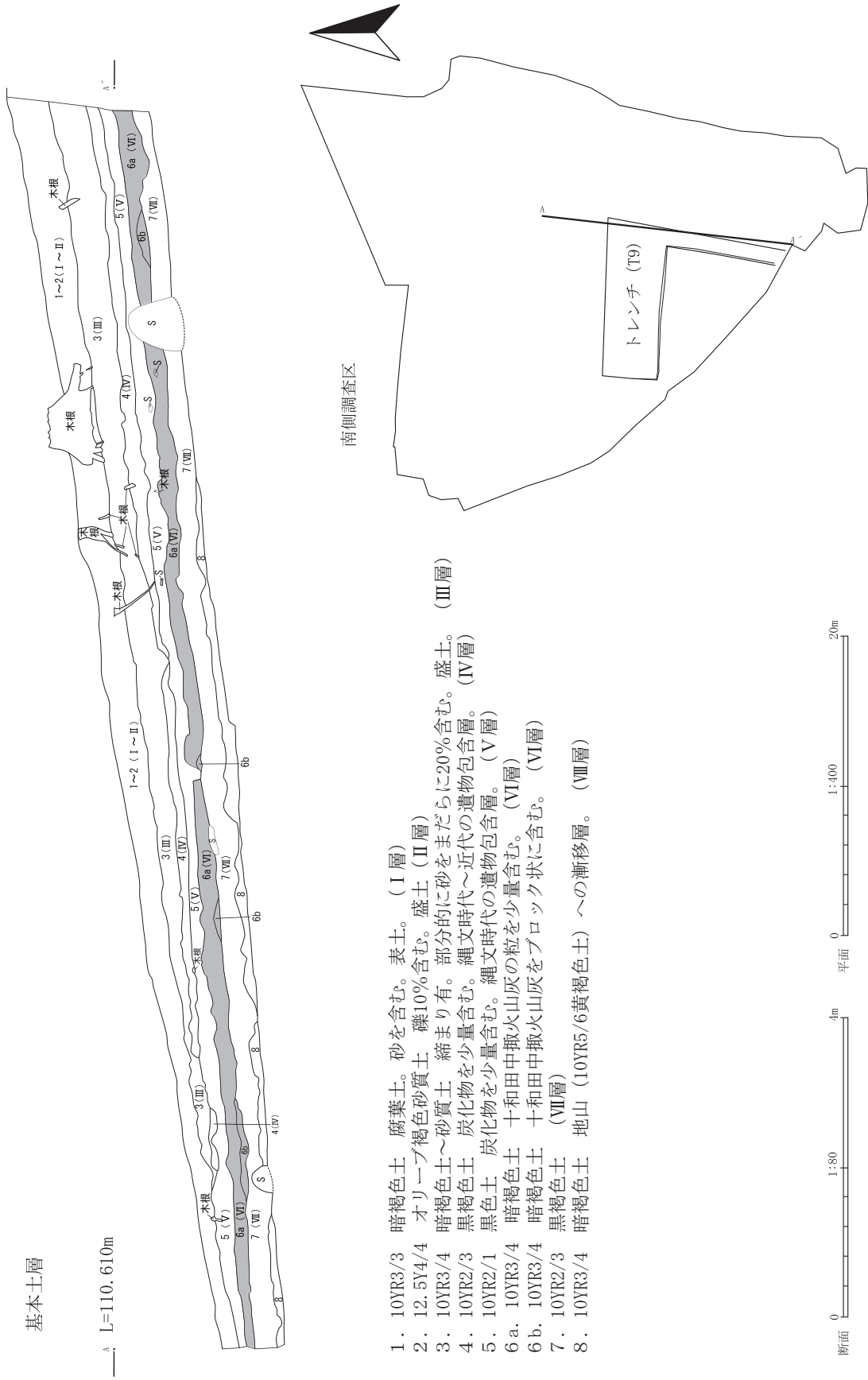
〈西側調査区〉



〈南側調査区〉



第7図 遺構配置図4



第8図 基本土層図

IV 検出された遺構と遺物

1 検出遺構

調査区は三つに分かれている（第4図、写真図版1）。北側調査区は西から東へと下る緩斜面地形をしている。そこからは上幅約9mの沢跡が見つかり鉄滓・羽口などが出土している。周辺に鉄生産（鍛冶施設）遺構が想定される。西側調査区は尾根の先端部にあたり、弥生時代の竪穴住居跡が2棟検出された。この時期の小規模な集落が西側にも広がっている可能性が高い。縄文時代の陥し穴も1基検出されている。南側調査区は南側が高く北側が低くなる緩斜面地形で、本遺跡の中でも最も標高が高く堆積土の状態も良好であったものの、遺物は少なく焼土を6基検出したのみであった。

出土遺物は縄文土器が中コンテナ1箱、弥生土器が中コンテナ1箱、石器類が小コンテナ1箱、鉄滓・羽口が中コンテナ2箱、陶磁器類が小コンテナ1箱である。

（1）竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第9・11図、写真図版6）

〔位置・検出状況〕西側調査区にある小規模な尾根、この尾根は南西側が高く北東側に向かって張り出している。この細尾根の先端部を下りて緩斜面になった所に位置している。平成21年度の調査で遺構の約半分を地山面のやや上で検出し、次年度以降は表土を薄く除去した後に見られる黒褐色土面で不明瞭ながら遺構の広がりを確認して作業した。

〔重複関係〕2号竪穴住居跡と重複しており、本遺構のほうが古いようである。

〔規模平面形〕遺構西側が沢によって削られて残っていないが、検出面で東西6.0m、南北6.5mの不整形長円形でその中心に石囲炉を設けていると推測される。

〔床・壁〕緩斜面を平坦に掘り込んでいるため西側は地山、東側は黒褐色土（Ⅶ層）を床面としている。壁は西壁だけしか残っていないが、西壁は殆ど後世の崩落がなく、ほぼ直立に立ちあがっていた。

〔埋土〕炭粒を不規則に含む黒色土及び黒褐色土を主体とする自然堆積である。

〔柱穴・周溝〕4基の柱穴がある。各柱穴間の距離は最大で2.05m、最短で1.46mである。柱は残っていなかったが、柱穴の規模から太さ10～15cmの柱が用いられていたと考えられる。

周溝は造られていない。

〔炉〕本遺構のほぼ中央に位置しているようである。南北86cm、東西85cmの範囲に11個の花崗岩を円形に配している。炉内には最上部には炭小粒を多量に含む黒色土、その下にはよく焼けた焼土が残っていた。

〔出土遺物〕（第15図、写真図版11・12）土器、礫石器などが出土している。9の鉢は床面に残り残された状態であったが、他の土器（1～8、10～12）は埋土から破片の状態出土したものである。しかしながら、その多くは本遺構に伴うものであろう。礫石器も床面に置かれていた状態で出土した。

〔時期〕出土した土器の特徴から弥生時代初頭と考えられる。

2号竪穴住居跡（第10・11図、写真図版7・8）

〔位置・検出状況〕遺跡西側の尾根先端部を下りた緩斜面部に位置している。1号竪穴住居跡とともに地山面ではなくその上層の黒褐色土の中から見つかった。

1 検出遺構

[重複関係] 1号竪穴住居跡と重複するものの土層断面でははっきりとは切り合い関係を把握できなかった。少なくとも1号竪穴住居跡が新しいようには見えなかったため、本遺構のほうが新しいのではないかと考えている。

[規模平面形] 北側及び西側の壁が残っていないが、直径約4.5mの不整円形をしていたと推測される。

[床・壁] 床は概ね平坦であるが、硬く締まるほどではない。壁は南側及び西側のみが残っているものの切株があり状態は悪かった。

[埋土] 炭粒を不規則に含む黒色土及び黒褐色土を主体とする自然堆積である。

[柱穴・周溝] 注意して床面を探したが無かった。

[炉] 地床炉である。切株の直下にあったので、本来はもう少し大きな炉であったと思われる。

[出土遺物] (第16図、写真図版12) 13は床面で潰れた状態で出土した。その他は埋土から出土している(14～19)が、中には1号竪穴住居跡の埋土から出土した破片と接合したものもある。

[時期] 弥生時代初頭と考えられる。

(2) 土 坑

1号土坑 (第12図、写真図版9)

[位置・検出状況] 遺跡の中でも最も標高が高い南側調査区の緩斜面部、Ⅲ層下位で検出した。

[規模・形状] 0.94×0.76×0.52mで平面形は円形を基調とする。底面は概ね平坦で壁は外傾して立ち上がっている。

[埋土] 黒褐色土の単層で、自然堆積と思われる。

[出土遺物・時期] 遺物は出土していない。検出面から縄文時代の遺構と考えられる。

2号土坑 (第12図、写真図版9)

[位置・検出状況] 尾根地形の西側調査区で1号竪穴住居跡と重複して検出された。新旧関係は1号竪穴住居跡より新しい。

[規模・形状] 0.75×0.68×0.67mで平面形は不整円形を呈する。底面は平坦で壁は外傾して立ち上がっている。

[埋土] 地山ブロックを不規則に含む人為堆積。

[出土遺物・時期] 近世陶磁器が出土しており、近世の遺構である。

(3) 陥 し 穴

1号陥し穴 (第12図、写真図版9)

[位置・検出状況] 西側調査区の東端部、Ⅳ層上面で検出した。

[規模・形状] 1.74×0.51×0.29mの長円形を呈するが残りは良いとはいえない。底面は概ね平坦で逆茂木痕は見られなかった。

[埋土] 黒褐色土を主体とした自然堆積である。

[出土遺物・時期] 出土遺物はない。縄文時代。

(4) 焼 土

南側調査区で4基、北側調査区で2基、西側調査区で1基の合計7基の焼土を検出している（第12・13図、写真図版10）。各焼土の内容については観察表にまとめた。

第2表 焼土観察表

計測値の単位：cm

遺構	位置	立地 検出面	規模 長軸、短軸、深さ	形状	被熱土、性格	出土遺物時期	その他
1号 焼土	北側 調査区	沢埋土内	18.17.4	円形	沢に棄てられた焼土	なし 縄文時代	
2号 焼土	北側 調査区	沢埋土内	165.74.4	不整形	沢に棄てられた焼土	なし 縄文時代	
3号 焼土	南側 調査区	緩斜面 Ⅲ・Ⅳ層	58.54.10	円形	焼土層及び焼土粒を微量に含 む黒褐色土からなる	なし 縄文時代	その場で焚いたもの
4号 焼土	南側 調査区	緩斜面 Ⅲ・Ⅳ層	107.76.6	円形か	焼土層及び炭粒・焼土粒を含 む黒褐色土からなる	なし 縄文時代	その場で焚いたもの
5号 焼土	南側 調査区	緩斜面 Ⅲ・Ⅳ層	54.44.9	円形か	焼土層と焼土ブロックを多量 に含む黒褐色土からなる	なし 縄文時代	その場で焚いたもの
6号 焼土	南側 調査区	緩斜面 Ⅳ・Ⅴ層	25.21.11	円形	焼土ブロックと炭粒からなる	なし 縄文時代前期か	
7号 焼土	北側 調査区	緩斜面 Ⅴ層か	73.72.7	不整形	良く焼けた焼土層	なし 縄文時代前期か	その場で焚いたもの

(5) 沢 跡

本遺跡は複数の尾根および緩斜面からなるため、尾根と尾根の間、或いは尾根と緩斜面の間には小規模な沢がみられる。中には流れが変わり埋没したものもあり、2箇所での埋没した沢跡を検出している。

北側調査区の沢跡（第14図、写真図版4・5）

上幅7～5m、深さ約2.5mで南西から北東方向へと流れ下っていた。今回の調査では約11mに渡り検出され、2カ所に断面観察用のトレンチを設定して底面まで掘り下げた。黒褐色土や暗褐色土の流れ込みの他に、大小の花崗岩が各所に見られる。また前述した焼土や鉄滓等もあったが、陶磁器や銭貨などは出土せず沢が埋まる前の時期は不明である。但し近代・現代の遺物も出土していないため、それよりは古くなる可能性が高い。

西側調査区の沢跡（第14図、写真図版11）

南西から北東方向へと流れ下っている埋没沢である。上幅6m以上、深さは1.5～2mで、底面近くまで掘り下げると水が湧いてくる。風化花崗岩起源のにぶい黄褐色砂層の下に黒褐色土がありこれが弥生時代及びそれよりも古い時期に相当すると思われる。よって1・2号竪穴住居跡の時期には沢も流れていた可能性が高いのだが、遺物・遺構は全く得られなかった。

2 出土遺物

本遺跡からは縄文土器、弥生土器、石器、陶磁器、鉄滓等の遺物が出土した。以下、種類ごとにその内容を記すとともに、それぞれ遺物観察表を作成しその特徴を整理した。

縄文土器（第16・17図、写真図版12・13）本遺跡では小コンテナ0.5箱分の出土があった。どの調査区からも見つかったはいるがその量は少ない。時期は早期と前期が目立つ。21～23は早期の土器である。貝殻腹縁文、押引き文を密に施している。破片資料により全体は分からないが、残存部には沈線は見られない。早期中葉頃であろうか。24～29は前期の土器である。24・25は地文に撚糸文を用いている。26～29は胎土に繊維を多く含む。26は結束の羽状縄文を27は0段多条、28は合撚りのようである。30～32は晩期とみられる土器である。何れも散在して出土したものである。

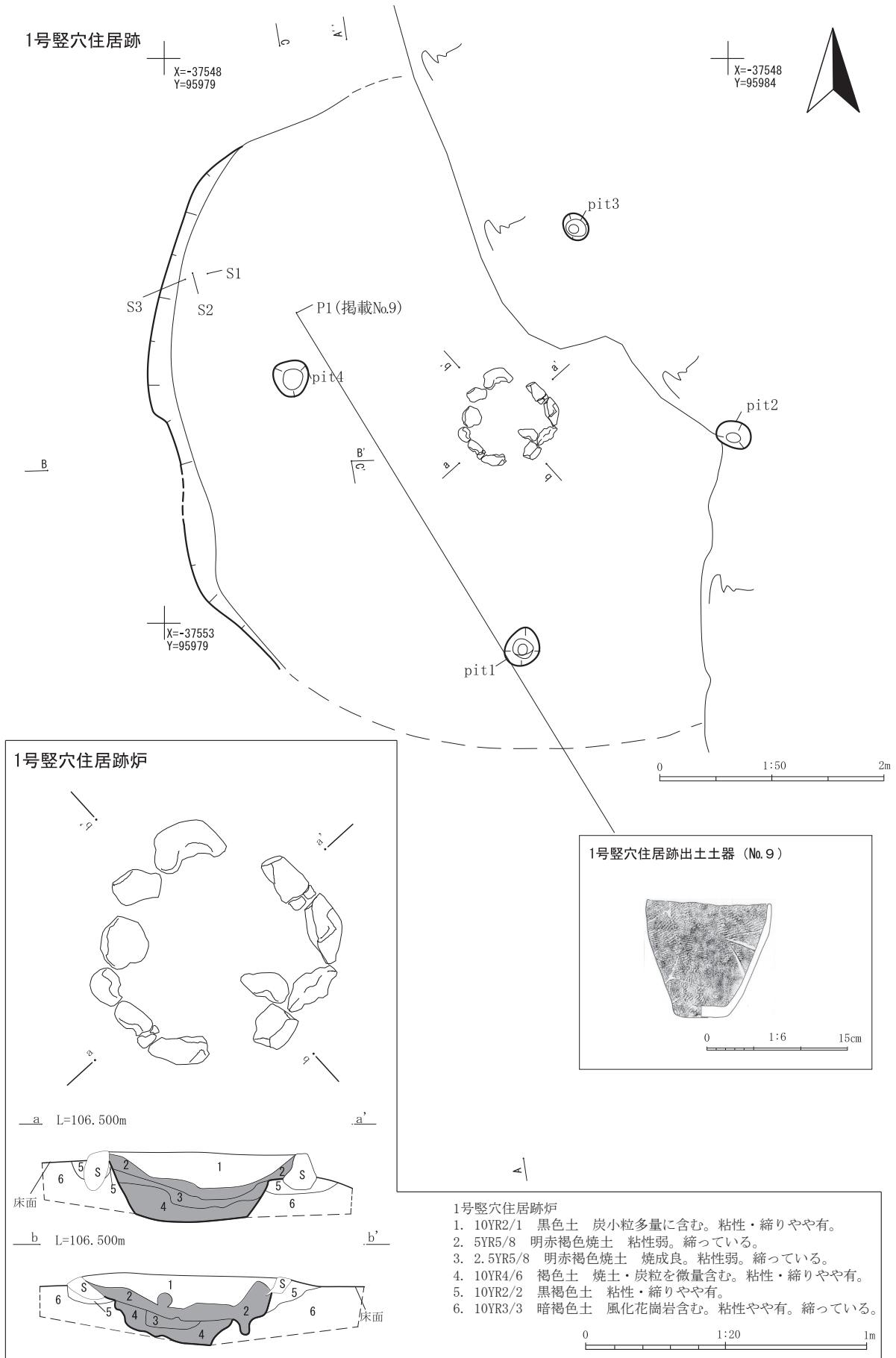
弥生土器（第15・16図、写真図版11・12）本遺跡では大コンテナ2箱分の出土があった。何れも西側調査区からで、1・2号竪穴住居跡内及びその周辺から出土している。1号竪穴住居跡から出土した土器を代表して1～12を掲載した。1・2は高坏の脚部である。器面はよく磨かれ、沈線文を施している。1にはその沈線内に朱が少し残っており、沈線を朱色にしていたことが分かる。3は壺の口頸部である。4～7は口縁部を無文とし、頸部に細い沈線が1本入り、胴部は地文のみの甕である。4・5は小形の甕、6・7は大形の甕となる。8・9は頸部の括れがない鉢である。全面に縄文を施文する。甕も鉢も内外に煤コゲが付着している個体が目立った。13～17は2号竪穴住居跡から出土したものである。13・14は口縁部無文で少し括れた頸部に沈線を入れる甕である。15・16は口縁部から底部まで縄文を施す鉢である。16には小山形の突起が付く。17は壺類だと思われる。18は甕の底部である。19は2号竪穴住居跡には伴わないかもしれない。20は4号焼土の周辺から出土した。撚糸文を全面に施している。

石器（第17・18図、写真図版13・14）弥生時代の1・2号竪穴住居跡内及びその近くを中心に出土している。北側調査区や南側調査区からはごく僅かしか出土しなかった。また調査では石鏃・石匙・搔削器類も出土せず、チップやフレイクも出土していない。本遺跡で最も多く出土したのは磨石（35～39）である。この他、礫の縁辺部に粗い打ち欠きによって刃部を作りだしたものがある（40・41）

陶磁器（第19図、写真図版14）陶磁器類の総量は小コンテナ1箱なので少ない。南側調査区と北側調査区を中心に出土している。明治以降の陶磁器もごく微量しか出土しなかった。

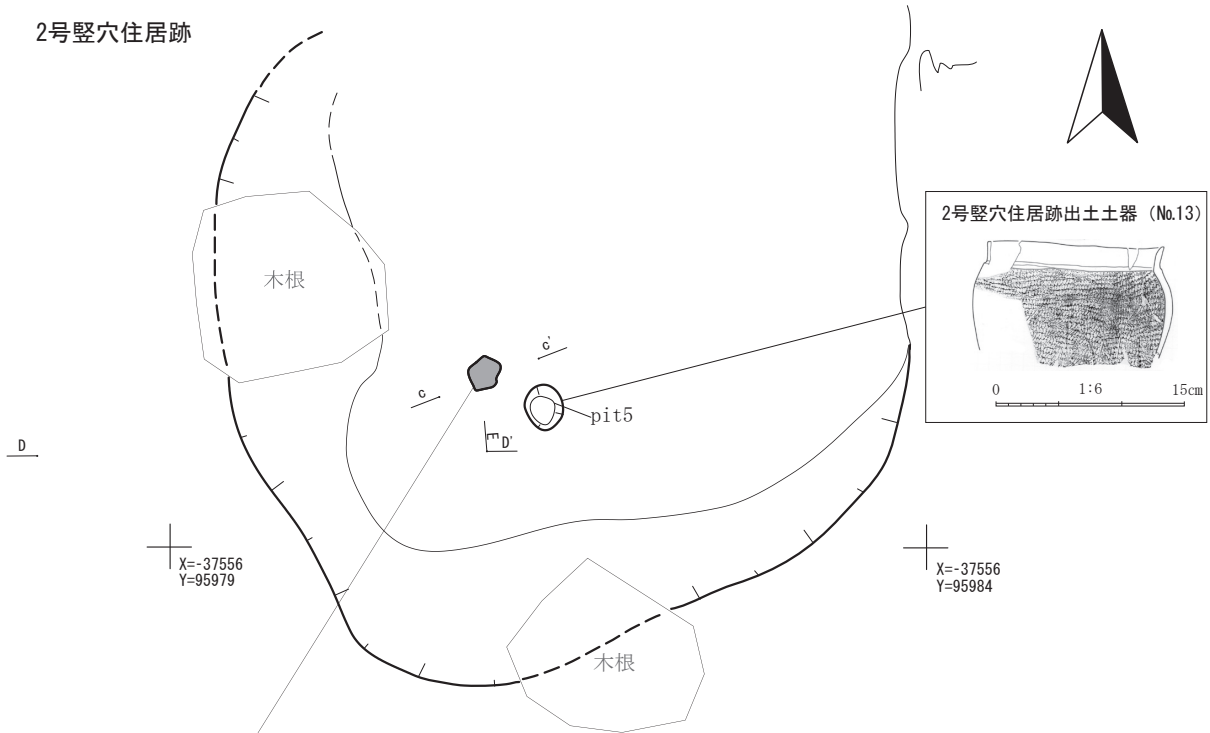
42・43は肥前産の磁器（染付）で18世紀後半頃のものである。44・45は瀬戸美濃産陶器17世紀後半から18世紀のものである。46・47は大堀相馬産の陶器で46は18世紀、47は失透性の釉が掛かるので19世紀とした。48は瀬戸美濃産陶器の火入れであろうか。49は灰色で粗い胎土の陶器で失透性の釉が掛けられている。東北在地産の陶器ではないかと思われる。50は瀬戸美濃産陶器皿である。鉄絵皿である。51は播鉢である。時期はよく分からないが近代まで新しくはない。

鉄滓 掲載していないが北側調査区の沢跡から鉄滓が数点出土している。

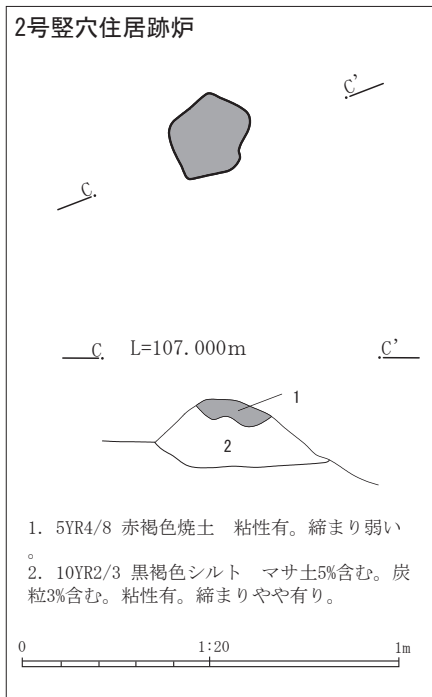


第9図 1号竖穴住居跡

2号竖穴住居跡

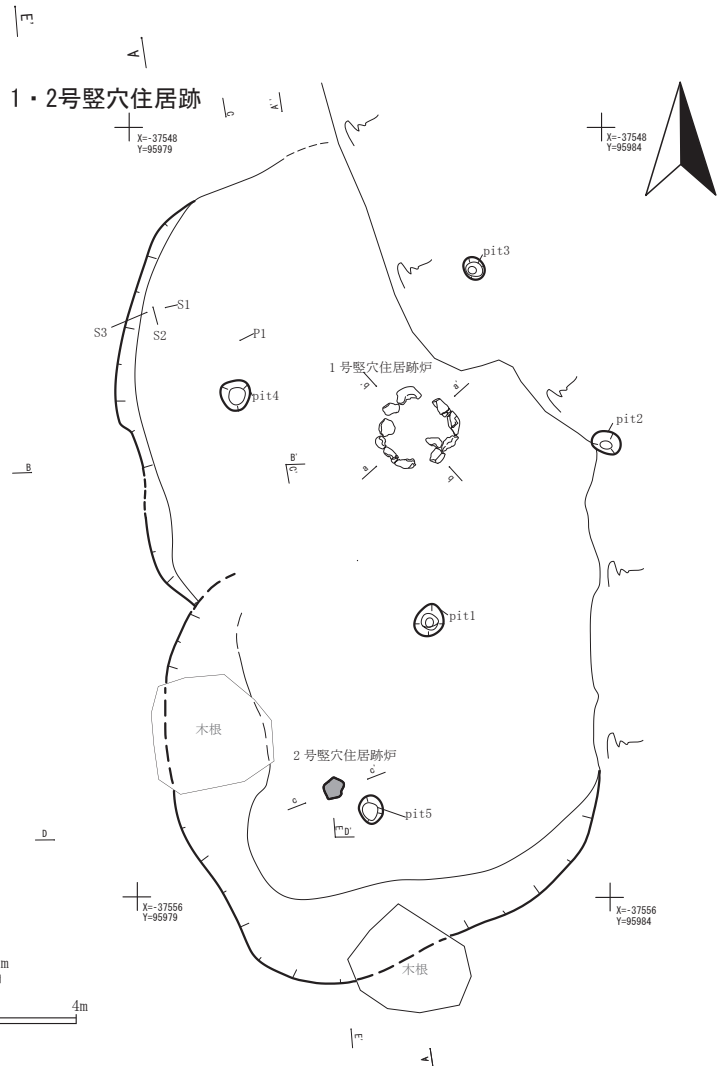


2号竖穴住居跡炉



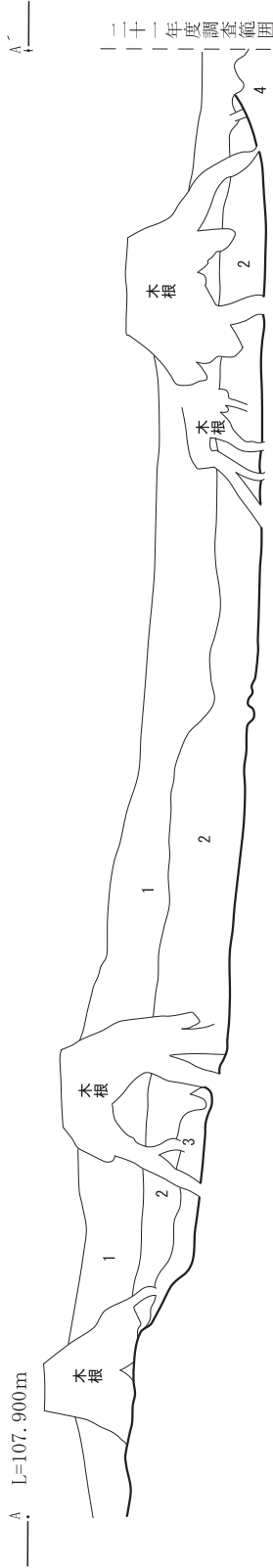
1. 5YR4/8 赤褐色焼土 粘性有。縮まり弱い。
2. 10YR2/3 黒褐色シルト マサ土5%含む。炭粒3%含む。粘性有。縮まりやや有り。

1・2号竖穴住居跡

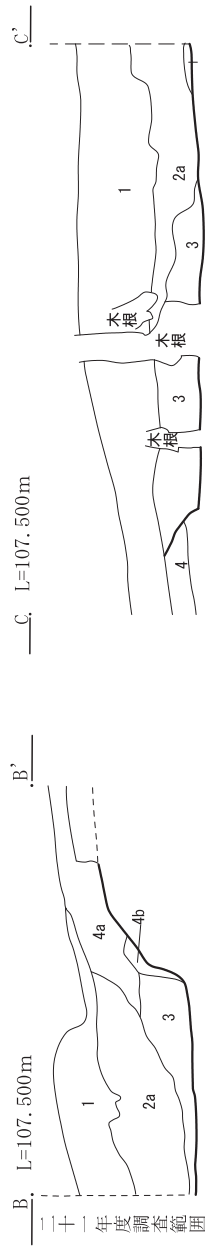


第10図 2号竖穴住居跡

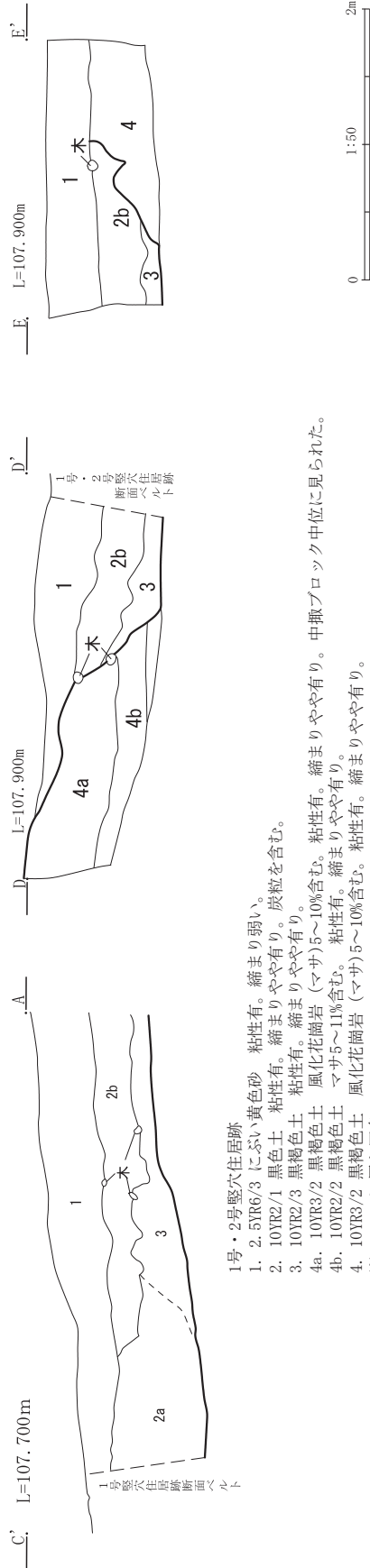
1号・2号竪穴住居跡



1号竪穴住居跡

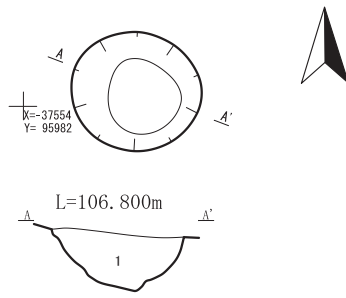


2号竪穴住居跡



第11図 1・2号竪穴住居跡

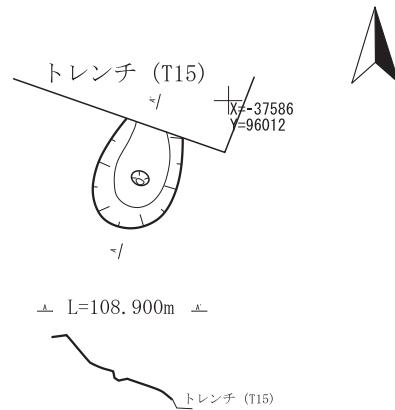
1号土坑



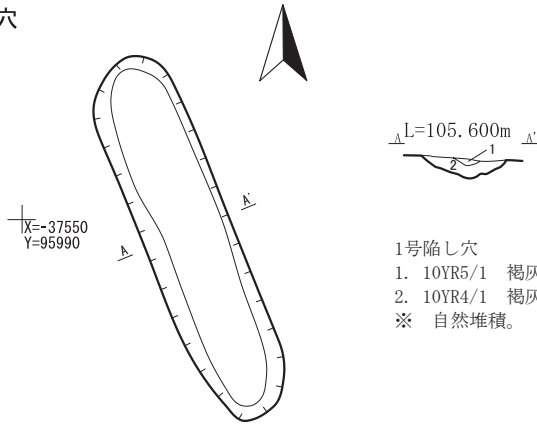
1号土坑

1. 2.5Y4/3 オリーブ褐色砂 黒褐色土ブロック
多量に含む。粘性・縮りやや弱。人為堆積。

2号土坑



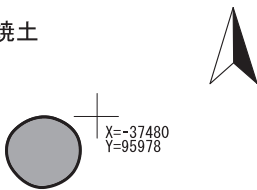
1号陥し穴



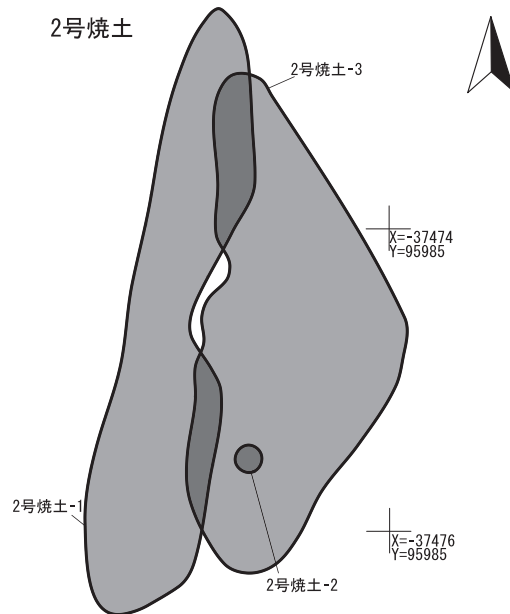
1号陥し穴

1. 10YR5/1 褐灰色砂 粘性なし。縮りやや有。
2. 10YR4/1 褐灰色砂質土 粘性・縮りやや有。
※ 自然堆積。

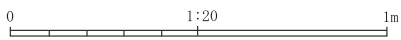
1号焼土



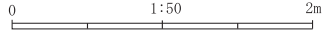
2号焼土



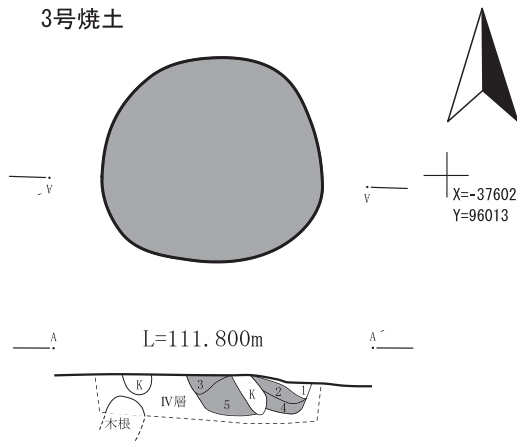
1号焼土



その他

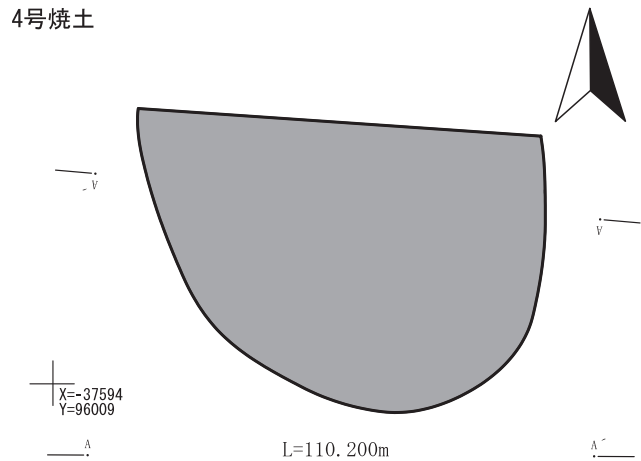


第12図 土坑、陥し穴、焼土(1)



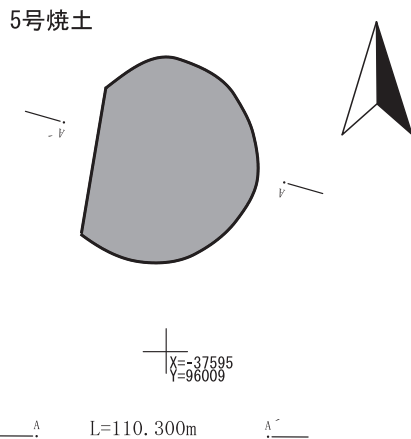
3号焼土

1. 10YR2/1 黒色土 粘性やや有。縮りなし。
 2. 5YR5/8 明赤褐色焼土 下に炭化物が入る。粘性なし。縮りなし。
 3. 10YR2/2 黒褐色土 下に炭化物が入る。粘性やや有。縮りあり。焼土粒を少量含。
 4. 10YR2/3 黒褐色土 焼土を微量含む。粘性やや有。縮りなし。
 5. 10YR2/3 黒褐色土 焼土を微量含。粘性やや有。縮りなし。
- ※ 4層と5層は同じものか？



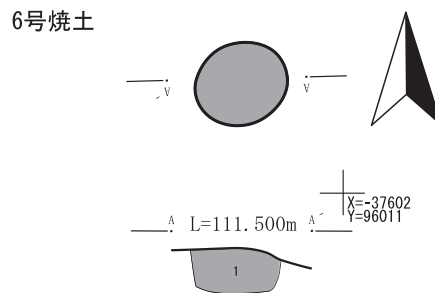
4号焼土

1. 10YR2/2 黒褐色土 炭粒・焼土を微量含。粘性有。縮りやや有。
2. 10YR2/2 黒褐色土 炭粒・焼土を微量含。粘性有。縮りやや有。
3. 10YR2/2 黒褐色土 炭粒・焼土を微量含。粘性有。縮りやや有。
4. 10YR3/1 黒褐色土 炭粒・焼土を微量含。粘性有。縮りやや有。
5. 10YR2/3 黒褐色土 焼土を少量含。粘性なし。縮りなし。
6. 5YR5/6 明赤褐色焼土 炭粒を少量含。粘性なし。縮りなし。



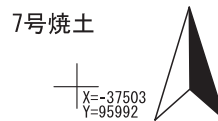
5号焼土

1. 5YR6/8 橙色焼土 暗褐色土中に焼土ブロック多量に混じる。粘性やや弱。縮りやや有。
2. 10YR2/3 黒褐色土 粘性・縮りやや有。
3. 10YR2/3 黒褐色土に橙色焼土ブロック少量含。粘性やや弱。縮りやや有。



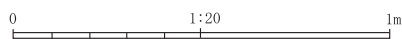
6号焼土

1. 10YR3/3 暗褐色土の中に5YR6/8 橙色焼土ブロックが少量入る。炭粒も微量に混じる。粘性・縮りやや有。

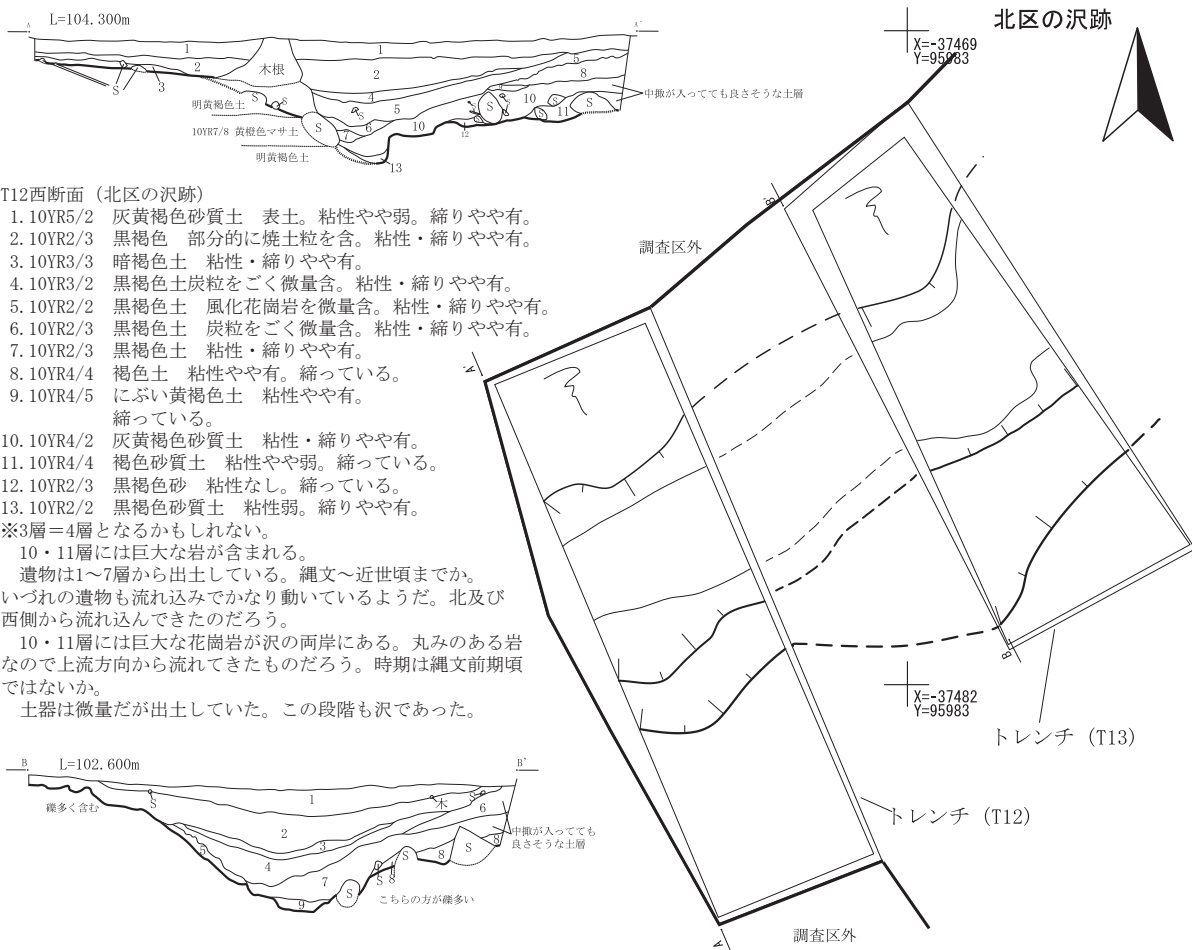


7号焼土

1. 5YR4/6 赤褐色 焼土 (強変)。粘性やや有。縮り有。
2. 10YR2/1 黒色 基層起源風倒木痕に含まれる黒色土。粘性やや有。縮り有。



第13図 焼土 (2)



T12西断面 (北区の沢跡)

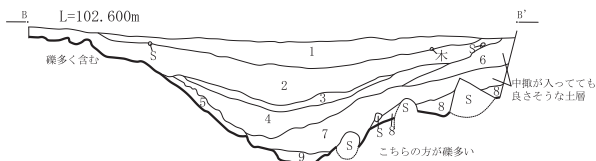
1. 10YR5/2 灰黄褐色砂質土 表土。粘性やや弱。縮りやや有。
2. 10YR2/3 黒褐色 部分的に焼土粒を含。粘性・縮りやや有。
3. 10YR3/3 暗褐色土 粘性・縮りやや有。
4. 10YR3/2 黒褐色土炭粒をごく微量含。粘性・縮りやや有。
5. 10YR2/2 黒褐色土 風化花崗岩を微量含。粘性・縮りやや有。
6. 10YR2/3 黒褐色土 炭粒をごく微量含。粘性・縮りやや有。
7. 10YR2/3 黒褐色土 粘性・縮りやや有。
8. 10YR4/4 褐色土 粘性やや有。縮っている。
9. 10YR4/5 にぶい黄褐色土 粘性やや有。縮っている。
10. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 粘性・縮りやや有。
11. 10YR4/4 褐色砂質土 粘性やや弱。縮っている。
12. 10YR2/3 黒褐色砂 粘性なし。縮っている。
13. 10YR2/2 黒褐色砂質土 粘性弱。縮りやや有。

※3層=4層となるかもしれない。

10・11層には巨大な岩が含まれる。
遺物は1~7層から出土している。縄文~近世頃までか。
いづれの遺物も流れ込みでかなり動いているようだ。北及び西側から流れ込んできたのだろう。

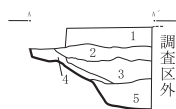
10・11層には巨大な花崗岩が沢の両岸にある。丸みのある岩なので上流方向から流れてきたものだろう。時期は縄文前期頃ではないか。

土器は微量だが出土していた。この段階も沢であった。

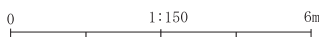


T13西断面 (北区の沢跡)

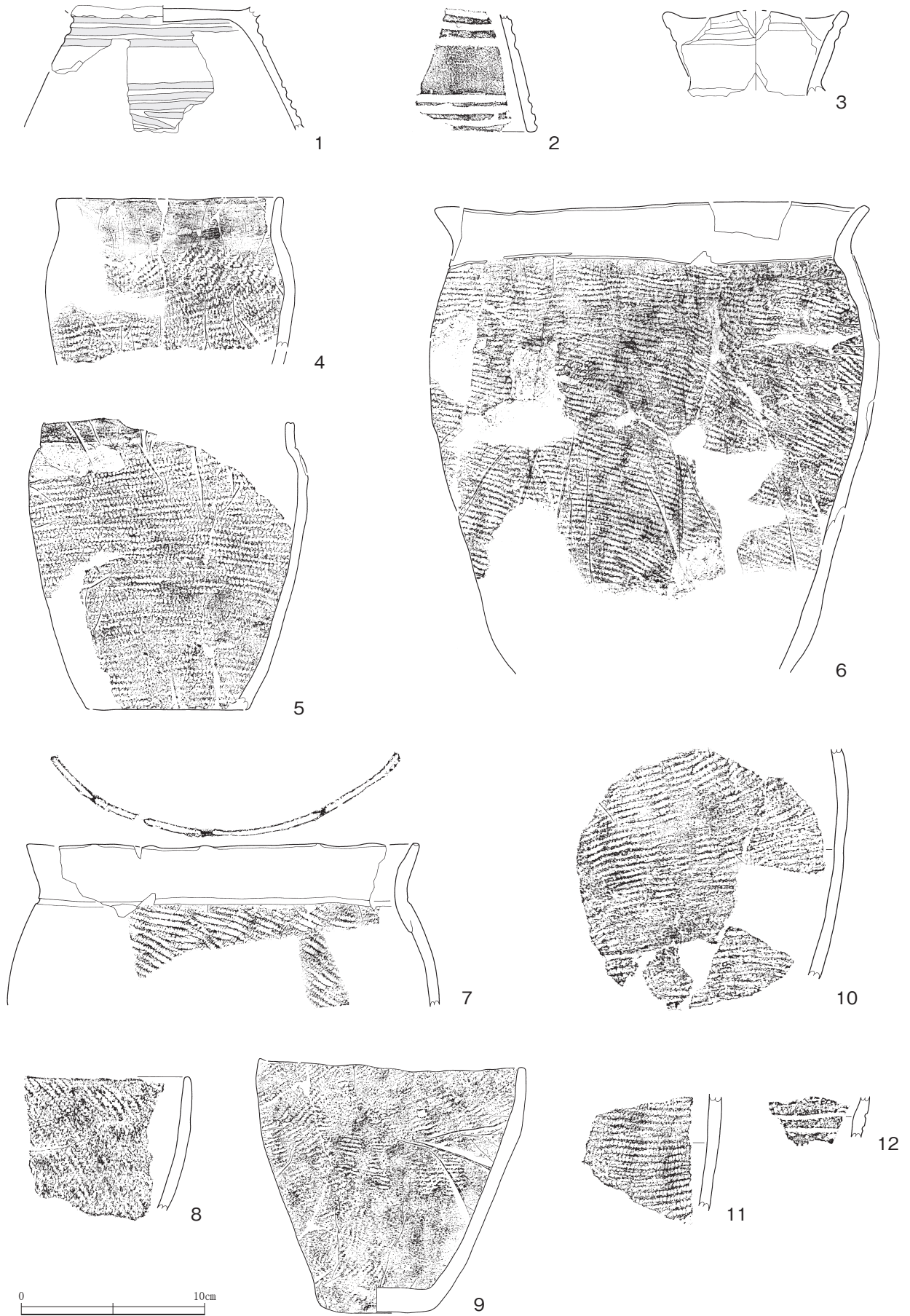
1. 10YR4/2 灰黄褐色砂質土 粘性やや弱。縮りやや有。
2. 10YR2/2 黒褐色土 粘性・縮りやや有。
3. 10YR3/2 黒褐色土 粘土粒多量に含。粘性・縮りやや有。
4. 10YR2/2 黒褐色土 粘性・縮りやや有。
5. 10YR3/3 暗褐色土 粘性・縮りやや有。
6. 10YR4/2 灰黄褐色土 粘性やや弱。縮っている。
7. 10YR3/4 暗褐色土 粘性やや弱。縮っている。
8. 10YR3/3 暗褐色土 粘性やや弱。縮っている。
9. 10YR2/3 黒褐色泥質土 粘性有。縮りやや有。



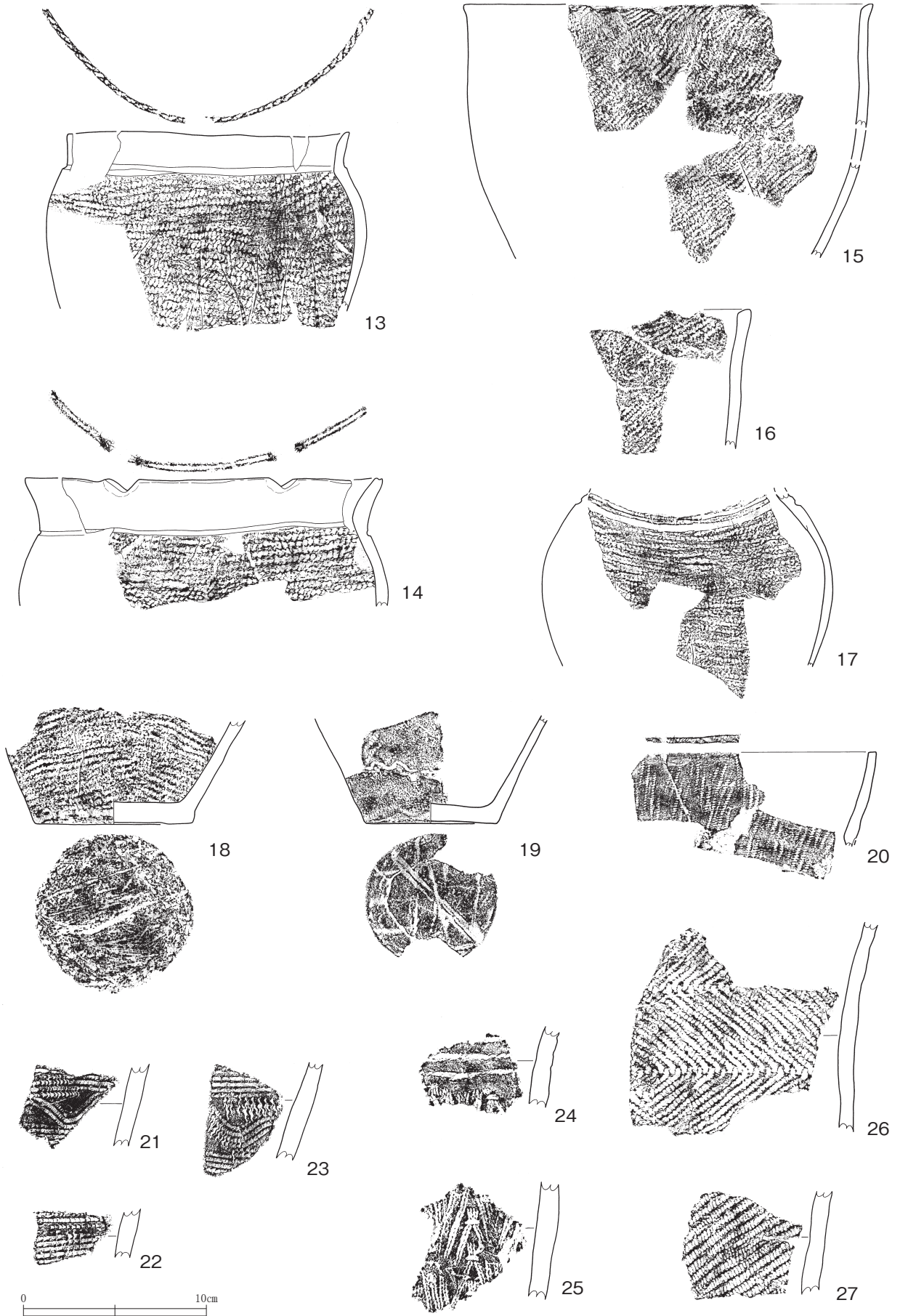
1. 10YR6/2 灰黄褐色砂 粘性無し。縮り弱い。
2. 10YR4/1 褐灰色砂質土 粘性弱い。縮りやや有。
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色砂質土 粘性弱い。縮りやや有。
4. 10YR6/4 にぶい黄褐色風化花崗岩 粘性無し。縮りやや有。
5. 10YR3/2 黒褐色土 粘性有。縮りやや有。



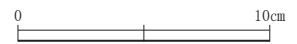
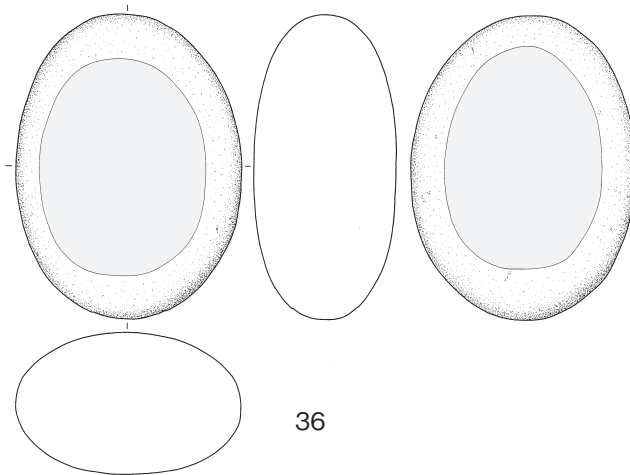
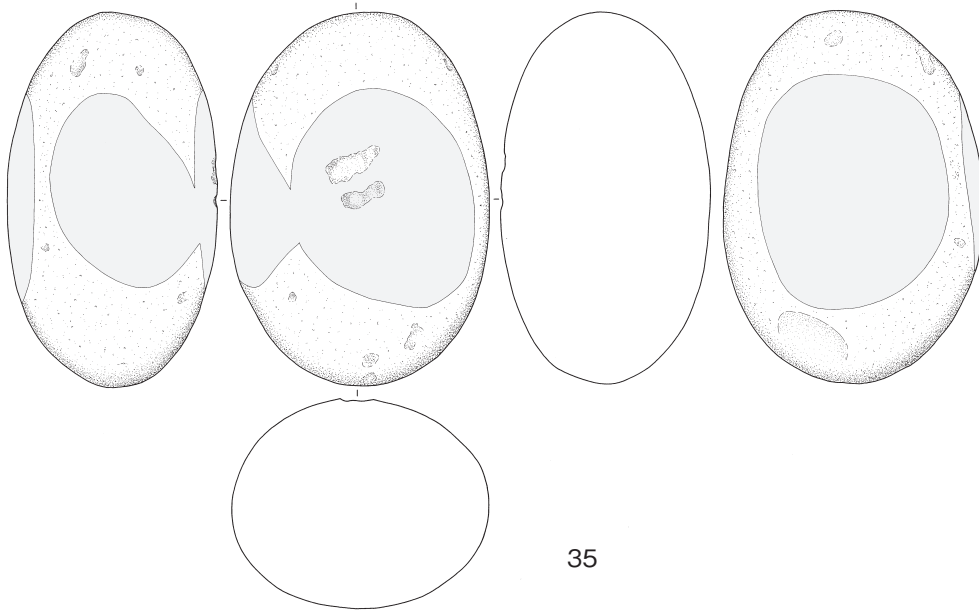
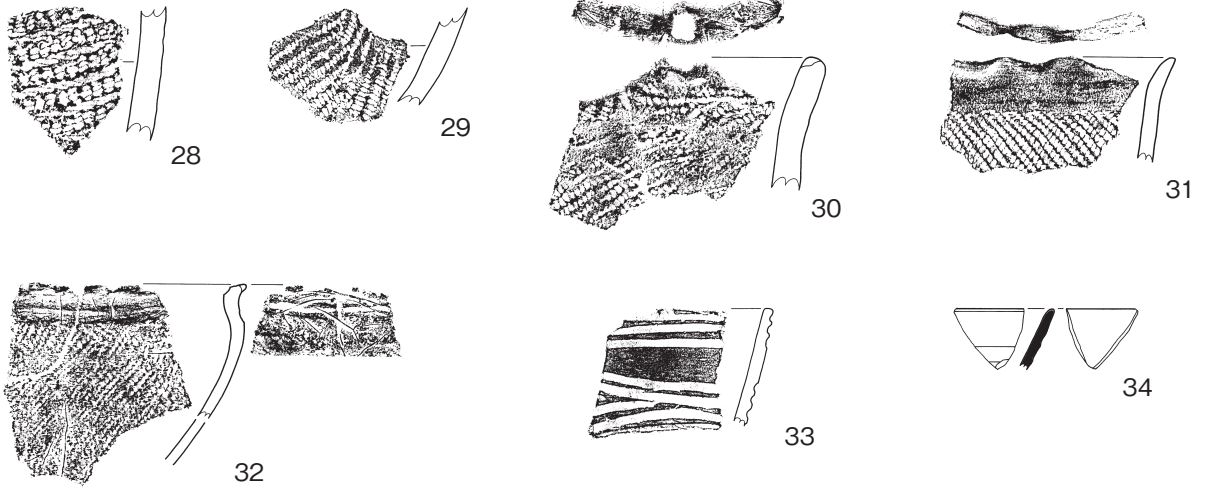
第14図 沢跡



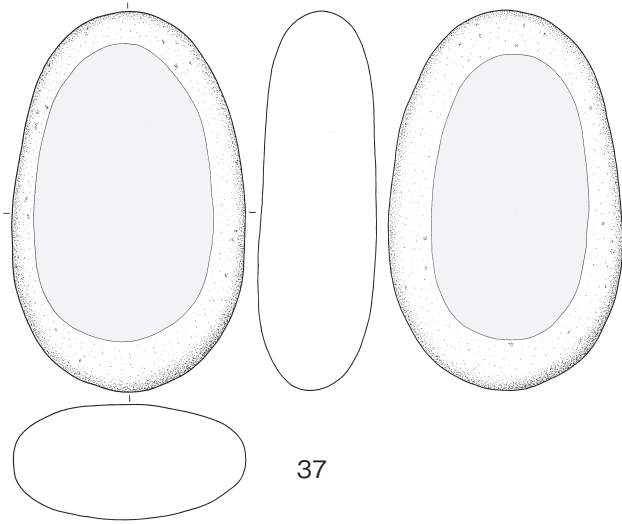
第15図 出土遺物(1)



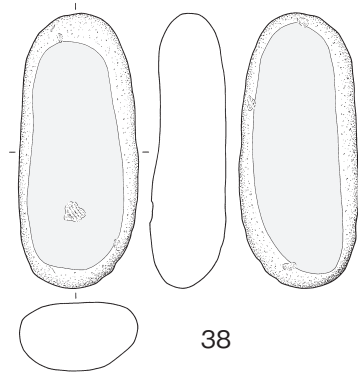
第16図 出土遺物(2)



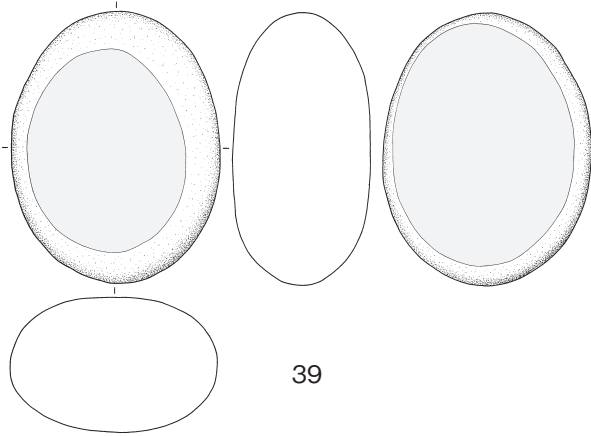
第17図 出土遺物 (3)



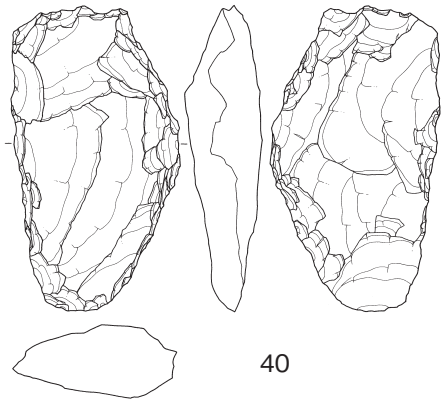
37



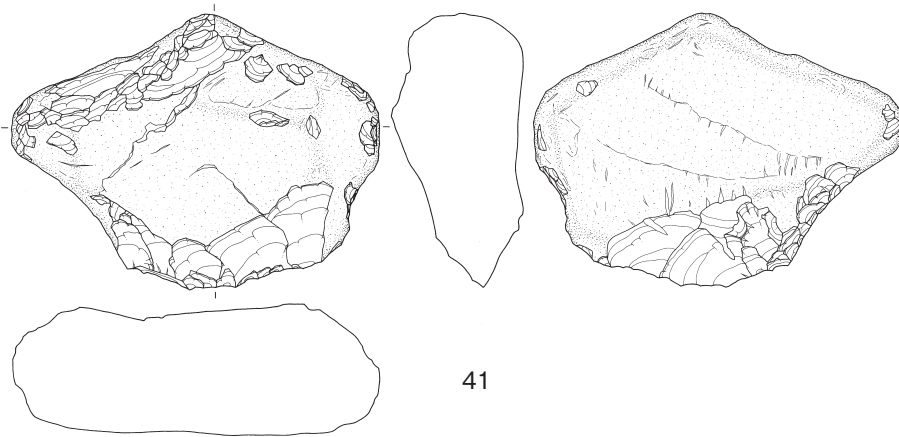
38



39



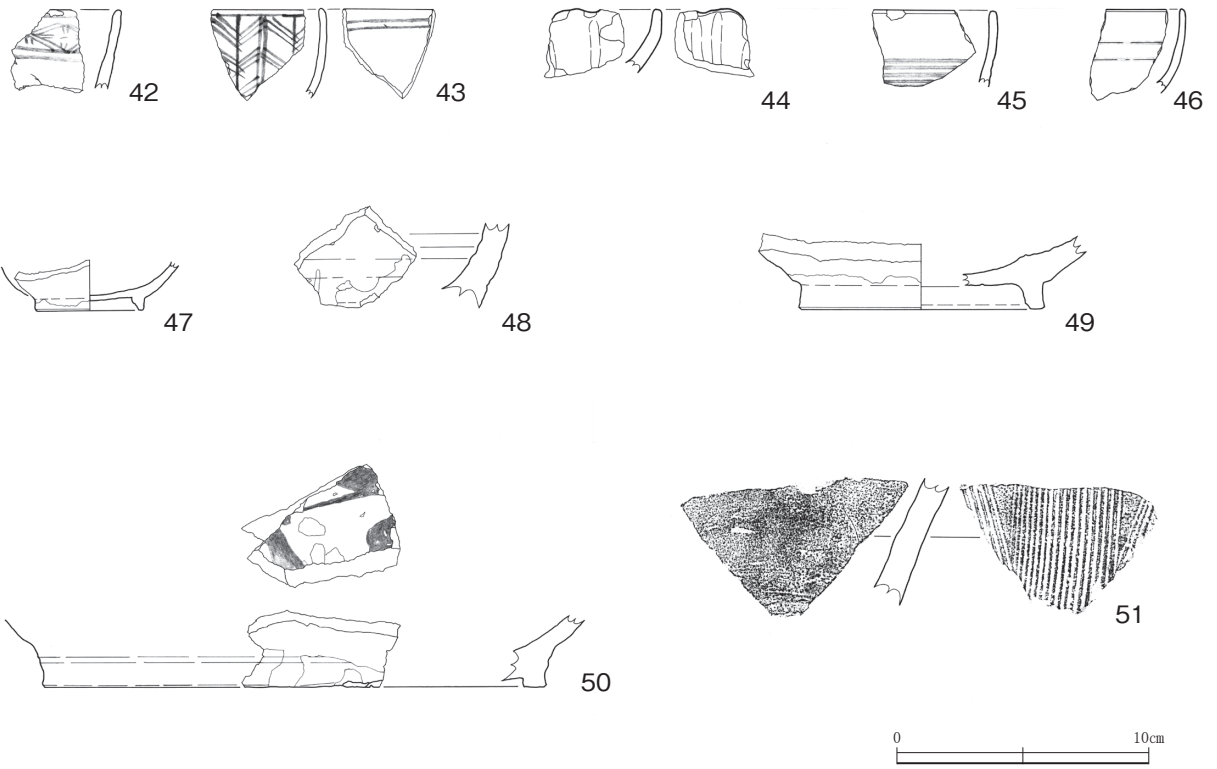
40



41



第18図 出土遺物(4)



第19図 出土遺物（5）

第3表 土器類観察表

掲載 番号	仮番	器種	部 位	出土地点	特 徴	その他
1	31	高坏	脚部	1号住居埋土及びその周辺	器面磨き、沈線内に朱	
2	40	高坏	脚部	1号住居 埋土	沈線	
3	41	壺か	口縁部	1号住居 2 a層	波状口縁、外面に2条の沈線、内面に1条の沈線	
4	30	小甕	口～胴部	1号住居 埋土	口縁部無文、胴部LR	
5	29	甕	口～底部	1号住居 埋土	口縁部無文、胴部LR	煤付着
6	20	甕	口～胴部	1号住居 埋土	頸部に細い沈線、胴部RL	
7	32	甕	口～胴部	1号住居 埋土	頸部に沈線、0段多条LR	煤付着
8	39	鉢	口～胴部	1号住居 埋土	RL	煤多く付着
9	28	鉢	口～胴部	1号住居 床面	LR 内面磨き	煤付着
10	21	甕	胴部	2号住居 埋土	LRか、無節ではないようだ	
11	22	甕	胴部	2号住居 埋土	RL	
12	27	甕	胴部	1号住居 埋土	沈線、地文見えない	煤付着
13	33	甕	口～胴部	2号住居下2 b層、1号住居埋土	頸部に沈線、LR	煤付着
14	34	甕	口～胴部	1号住居埋土、2号住居埋土、Ⅲ層	頸部の沈線に朱、LR	煤付着
15	35	鉢	口～胴部	1号住居埋土、2号住居2 b層	LR	煤付着
16	36	鉢	口～胴部	2号住居 2 b層	LR	15と同一個体
17	37	壺	胴部	2号住居 2 b層	頸部に沈線、RL	内面に煤付着
18	42	甕か	底部	遺構外（2号住居南側）	LRか 胎土に砂多	
19	38	甕か	底部	2号住居2 b層・2層ほか	LR端部を結ぶ	
20	12	甕	口縁部	4号焼土 T9	捺糸文L	
21	44	鉢	胴部	遺構外T5 5層	貝殻腹縁文、押引き	
22	45	鉢	胴部	遺構外T5 5層	貝殻腹縁文、押引き	
23	17	鉢	胴部	T5 遺構外	貝殻腹縁文	
24	18	深鉢か	胴部	T12 遺構外	絡糸体圧痕、その下は不明	
25	16	深鉢か	胴部	T12 遺構外	木目状捺糸文R	
26	23	深鉢	胴部	遺構外 沢近く	結束RL、繊維	
27	24	深鉢か	胴部	遺構外	0段多条LR。繊維多	
28	25	深鉢か	胴部	1号住居 埋土	合捺りか、繊維含みそう	
29	26	鉢	胴部	トレンチ 遺構外	LR	
30	14	深鉢か	口～胴部	T12 遺構外	口縁に突起、LR、胎土に小石	
31	15	鉢	口縁部	T9 遺構外	波状口縁、胴部RL	
32	13	鉢	口～胴部	T9 遺構外	地文見えない	
33	43	甕か	口縁部	遺構外	沈線	
34	11	坏	口縁部	T6 遺構外	須恵器	

第4表 陶磁器観察表

掲載 番号	仮番号	種別	器種	出土地点	部位	産地・年代・特徴	その他
42	5	磁器	猪口か	北側調査区南東隅 暗褐色土層	口縁	肥前、18世紀後半、染付、四方禪文	
43	4	磁器	坏	南西調査区 III層上面	口縁	肥前、18世紀後半、染付、矢羽根文	
44	8	陶器	皿	T 12 の 3層	口縁	瀬戸美濃、17世紀後半以降か、灰釉	
45	10	陶器	碗	1号土坑 埋土	口縁	瀬戸美濃、18世紀、腰鍔碗	
46	9	陶器	碗	北側調査区の南東 暗褐色土層	口縁	大堀相馬、18世紀、灰釉	
47	2	陶器	碗	T 5南 7層	底部	大堀相馬、19世紀、灰釉	
48	7	陶器		T 6南西、T 6の4層	胴部	瀬戸美濃、18-19世紀	
49	1	陶器	壺類	南西調査区 III層	底部	東北在地、19世紀、藁灰釉	県内窯か
50	3	陶器	皿	T 9 IV層	底部	瀬戸美濃、17世紀前半以降か、鉄絵	
51	6	陶器	播鉢	T 5南 7層	胴部	瀬戸美濃、近世、鉄釉	

第5表 石器類観察表

掲載 番号	仮番号	種類	出土地点	計測値：cm・g				石材	特徴
				長さ	幅	厚さ	重量		
35	1	磨石	1号住居埋土	14.9	102	8.3	1686.5	デイサイト 北上山地 中生代 白亜紀	
36	6	磨石	1号住居床面	12.1	8.9	5.6	876.4	花崗岩 北上山地 中生代 白亜紀	
37	5	磨石	1号住居床面	15.1	9.2	4.7	961.8	アプライト 北上山地 中生代 白亜紀	
38	3	敲石か	T 13 暗褐色土	10.9	4.8	3.0	222.1	デイサイト 北上山地 中生代 白亜紀	
39	2	磨石	北側調査区沢2層	10.8	8.2	5.4	712.8	安山岩 北上山地 中生代 白亜紀	
40	7	削器	2号住居2～3層	12.1	6.7	2.9	243.8	ホルンフェルス 北上山地 中～古生代	
41	4	不明	T 13 黒色土層	10.9	14.6	5.2	992.4	ホルンフェルス 北上山地 中生代初期 の頁岩が白亜紀に熱変成	周囲に細かい打ち欠き

V 自然科学的分析

佐原Ⅱ遺跡における放射性炭素年代（AMS 測定）

（株）加速器分析研究所

1 測定対象試料

佐原Ⅱ遺跡は、岩手県宮古市の沿岸部に所在する。測定対象試料は、東側へ向かって下る小規模な緩斜面にて検出された1号住居炉跡出土木炭（No.1：IAAA-91978）1点である。

2 測定の意義

出土遺物がないこの遺構の時期を明らかにする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の表面的な不純物を取り除く。
- (2) 酸処理、アルカリ処理、酸処理（AAA：Acid Alkali Acid）により内面的な不純物を取り除く。最初の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。アルカリ処理では1Nの水酸化ナトリウム水溶液（80℃）を用いて数時間処理する。なお、AAA処理において、アルカリ濃度が1N未満の場合、表中にAaAと記載する。その後、超純水で中性になるまで希釈する。最後の酸処理では1Nの塩酸（80℃）を用いて数時間処理した後、超純水で中性になるまで希釈し、90℃で乾燥する。希釈の際には、遠心分離機を使用する。
- (3) 試料を酸化銅と共に石英管に詰め、真空下で封じ切り、500℃で30分、850℃で2時間加熱する。
- (4) 液体窒素とエタノール・ドライアイスの温度差を利用し、真空ラインで二酸化炭素（CO₂）を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイトを作製する。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードに詰め、それをホイールにはめ込み、加速器に装着する。

4 測定方法

測定機器は、3MV タンデム加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HO_x II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) 年代値の算出には、Libby の半減期 (5568 年) を使用する (Stuiver and Polach 1977)。
- (2) ^{14}C 年代 (Libby Age : yrBP) は、過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年 (0yrBP) として遡る年代である。この値は、 $\delta^{13}\text{C}$ によって補正された値である。 ^{14}C 年代と誤差は、1桁目を四捨五入して10年単位で表示される。また、 ^{14}C 年代の誤差 ($\pm 1\sigma$) は、試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が 68.2%であることを意味する。
- (3) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の ^{13}C 濃度 ($^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$) を測定し、基準試料からのずれを示した値である。同位体比は、いずれも基準値からのずれを千分偏差 (%) で表される。測定には質量分析計あるいは加速器を用いる。加速器により $^{13}\text{C}/^{12}\text{C}$ を測定した場合には表中に (AMS) と注記する。
- (4) pMC (percent Modern Carbon) は、標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。
- (5) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、 ^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。暦年較正プログラムに入力される値は、下一桁を四捨五入しない ^{14}C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal04 データベース (Reimer et al 2004) を用い、OxCalv4.1 較正プログラム (Bronk Ramsey 1995 Bronk Ramsey 2001 Bronk Ramsey, van der Plicht and Weninger 2001) を使用した。

6 測定結果

1号住居炉跡出土試料 No.1 の ^{14}C 年代は $2470 \pm 30\text{yrBP}$ である。縄文時代から弥生時代への移行期頃に相当する年代である。

炭素含有率は 60% を超える十分な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	$\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-91978	No.1	1号住居 炉跡	木炭	AAA	-26.50 ± 0.42	$2,470 \pm 30$	73.55 ± 0.29

[#3294]

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-91978	$2,490 \pm 30$	73.32 ± 0.28	$2,467 \pm 31$	752BC - 686BC (25.2%) 668BC - 634BC (12.2%) 624BC - 613BC (3.3%) 596BC - 517BC (27.6%)	761BC - 682BC (28.0%) 671BC - 481BC (57.3%) 468BC - 415BC (10.1%)

[参考値]

参考文献

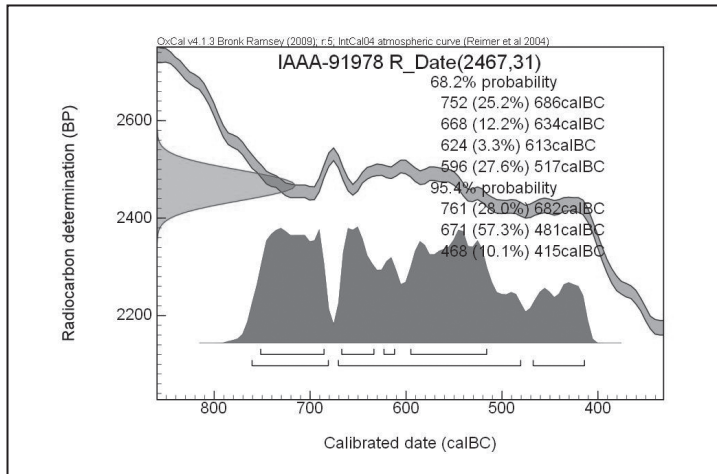
Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19, 355-363

Bronk Ramsey C. 1995 Radiocarbon calibration and analysis of stratigraphy: the OxCal Program, *Radiocarbon* 37(2), 425-430

Bronk Ramsey C. 2001 Development of the Radiocarbon Program OxCal, *Radiocarbon* 43(2A), 355-363

Bronk Ramsey C., van der Plicht J. and Weninger B. 2001 'Wiggle Matching' radiocarbon dates, *Radiocarbon* 43(2A), 381-389

Reimer, P.J. et al. 2004 IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26cal kyr BP, *Radiocarbon* 46, 1029-1058



[参考] 暦年較正年代グラフ

VI 総 括

佐原Ⅱ遺跡は宮古市佐原3丁目30番1ほかに所在する。国道45号と佐原団地に北側以外の三方向を囲まれている。遺跡は小規模な3つの尾根とその間を流れる沢からなる。調査区はその小規模な3つの尾根沿いに発達した緩斜面に設定されており、北側調査区・南側調査区・西側調査区とした。これらの調査区は沢によって分かれているので、これから各調査区ごとにその状況をまとめていくが、その前に、検出遺構・出土遺物の総量を記しておく。

遺構は弥生時代の竪穴住居跡2棟、土坑2基（縄文時代1基、近世1基）、縄文時代の陥し穴1基、縄文時代の焼土7基（この他、沢跡が2カ所、近現代の水田2枚を検出した）である。

遺物は縄文土器が小コンテナ0.5箱、弥生土器が大コンテナ2箱、石器類が小コンテナ1箱、鉄滓が小コンテナ1箱、陶磁器類が小コンテナ1箱である。

北側調査区は西から東へと張出す尾根の南側に発達した緩斜面にあたる。調査区の北端部には沢跡が1条検出された。沢跡は完全に埋没しており、現況では沢があることは認識できなかった。精査を始めると鉄滓が少量出土していたので上流部（調査区外）には鉄生産関連の施設があったのかもしれない。さらに掘り下げると、焼土が2基検出された。これらの焼土に遺物は伴わないが、基本土層と沢埋土とを比較すると縄文時代にあたる可能性が高いと判断した。沢埋土からは縄文時代前期の土器が数片出土していた。沢の南側の緩斜面にも焼土が1基確認されている。遺構の周囲からは縄文時代前期の土器が少量出土している。

南側調査区は南から北へと下る緩斜面に設置されている。この緩斜面は東側の佐原団地から連続するものであろう。本遺跡の中では最も標高が高い場所にあり、攪乱も少なく土の残りも一番良かった。中振火山灰の堆積も確認されたが、中振火山灰と直接関係を持つ遺構や遺物はなかった。縄文時代の焼土が4基確認されたが竪穴住居跡はなかった。土坑が1基検出されているが近世のものである。

西側調査区は南西から北東へ張出す尾根の先端を下りたところに広がる緩斜面に設置されている。調査区は2条の埋没沢にはさまれているが、沢には遺構・遺物はなかった。この調査区では弥生時代の竪穴住居跡2棟が重複して検出された。2棟は尾根の先端を下りた沢の近くの緩斜面部分に立地している。1号竪穴住居跡は石囲炉、2号竪穴住居跡は地床炉であった。2号竪穴住居跡のほうが新しいがどちらも出土した土器を見ると弥生時代初頭で大きな時期差はないと判断される。土器の器種を見ると高坏のほか、無文の甕と鉢からなる。甕と鉢にはススコゲの付着している個体が多くあり、かなり使い込まれたものという印象を持つ。その付着している範囲について図化してまとめた（第20図）。その一方で高坏については沈線部に朱を塗っており精緻なつくりをしていた。

本遺跡では弥生時代初頭の竪穴住居跡が2棟確認された他に竪穴住居跡は見つかっていない。縄文時代晩期末葉の遺構はなく、遺物も得られなかった。時期幅を広く晩期全般の土器としてもごく微量しか出土しておらず、上記の竪穴住居跡は晩期から連続するものではないと言える。縄文時代の遺物はどの時期も多くはなく、焼土や土坑・陥し穴が僅かに残る程度で短期的な土地利用に限られていたようである。つまりは縄文時代に於いて佐原Ⅱ遺跡は集落を営むに適した場所ではなかったといえよう。そのような場に弥生時代になって小規模な集落が営まれるようになったのは、生業基盤に変化が生じたためではなかろうか。その変化とは直接的な根拠を欠くものの、やはり稲作ではないかと考えられる。小さな沢沿いの僅かな平地に竪穴住居跡と水田を設けていたのだろう（水田は未検出だが、

沢沿いに近現代の水田はあった)。小さな沢は水田に水を引き込み易いと推測される。本県の沿岸地域のように平野部があまり発達していない土地では、沢沿いにある狭い平坦面に分散して生活を営んでいたと推察される。狩猟採集を基盤としていた可能性も当初は考えたが、そうであれば縄文時代の集落がもっと見つかってよいはずだと思うのだが、本遺跡では狩猟採集に適した土地ではなかったのか、縄文時代においては極めて短時間の利用に留まっていたのは明らかである。本遺跡では弥生時代前期及びそれ以降の遺構・遺物もないので集落の存続時期は極めて短かったといえる。

大船渡市にある上甲子遺跡では縄文時代晩期末から弥生時代初頭の集落が見つまっている。市内中心部ではなく、かなり山間部に入った場所にあり、その中でも沢沿いのやや開けた緩斜面部に6棟の竪穴住居跡が検出されていた。石囲炉をもつ住居と地床炉を持つ住居から成り、佐原Ⅱ遺跡の集落と時期、立地、竪穴住居跡の特徴などで良く似た例として挙げておきたい。どちらの遺跡も弥生時代初頭以降は集落が廃絶するという点でも共通しており、このような集落の盛衰には当時の環境（気候）が大きく影響していたと考えたい。弥生時代においては、長期にわたって集落が形成される例が本県では殆どないので集落の成立と展開を時期ごとに整理してみれば何らかの傾向が見えてくるのではなかろうか。

引用・参考文献

- 1983『君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書』岩手県埋文センター文化財調査報告書第62集（財）岩手県埋蔵文化財センター
- 1987『中沢浜貝塚発掘調査概報Ⅲ』陸前高田市埋蔵文化財報告書第11集 陸前高田市教育委員会
- 1990『物見崎遺跡・監物館跡発掘調査報告書』岩文振埋文調査報告書第157集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 1991『上村貝塚発掘調査報告書』岩文振埋文調査報告書第158集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 1995『大日向Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調査報告書第225集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 1997『上鷹生遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調査報告書第253集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 1997『上甲子遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調査報告書第254集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 2000『川岸場Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調査報告書第317集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 2006『金附遺跡発掘調査報告書』岩文振埋文調査報告書第482集（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 小田野哲憲 1987「岩手の弥生式土器編年試論」『岩手県立博物館研究報告第5号』岩手県立博物館
- 佐藤嘉広 1989「東北地方北部における弥生文化受容期の様相」『岩手県立博物館研究報告第7号』岩手県立博物館
- 小林正史ほか 2003「黒斑からみた弥生土器の覆い型野焼きの特徴」『日本考古学』第16号 日本考古学協会
- 石川日出志 2005「岩手の弥生文化研究の諸問題」『2005年岩手考古学会第34回研究大会 岩手県における弥生前期から中期の諸問題』岩手考古学会



第20図 弥生土器に付着したスス・コゲ

写真図版



遺跡全景（南から）



遺跡全景（北から）



北側調査区現況（南から）



北側調査区調査前（東から）



北側調査区調査後（東から）



南側調査区完掘状況（南から）



T9・14～16完掘状況（西から）

写真図版2 調査区現況



T 8 完掘状況 (北から)



西側調査区調査状況 (東から)



T 16 断面中礫火山灰堆積状況 (西から)



T14 (南から)



22 T 1 (東から)



22 T 2 (東から)



西側調査区 近代以降の水田 (南から)



西側調査区 近代以降の水田 (東から)



南側調査区の沢跡断面（東から）



南側調査区の沢跡断面（東から）

写真図版 4 北側調査区 沢跡 1



南側調査区の沢跡（北から）



南側調査区の沢跡（北から）



1号竪穴住居跡平面（東から）



1号竪穴住居跡断面（東から）



1号竪穴住居跡断面（北から）



1号竪穴住居跡（北から）

写真図版6 1号竪穴住居跡（1）



1号竪穴住居跡炉平面（東から）



1号竪穴住居跡炉断面（南東から）



1号竪穴住居跡炉断面（北東から）



1号竪穴住居跡出土遺物



写真手前が1号竪穴住居跡、奥が2号竪穴住居跡（北から）

写真図版7 1号竪穴住居跡（2）、2号竪穴住居跡（1）



2号竪穴住居跡平面（東から）



2号竪穴住居跡断面（南から）



2号竪穴住居跡断面（西から）

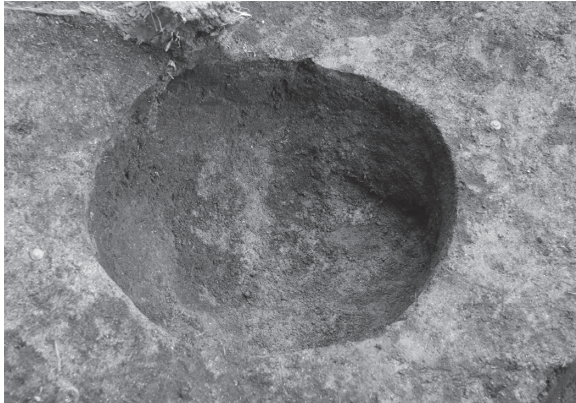


2号竪穴住居跡炉（南から）



2号竪穴住居跡炉断面（南から）

写真図版8 2号竪穴住居跡（2）



1号土坑平面（南から）



1号土坑断面（南から）



2号土坑平面（北から）



2号土坑平面（北から）



1号陥し穴平面（南から）



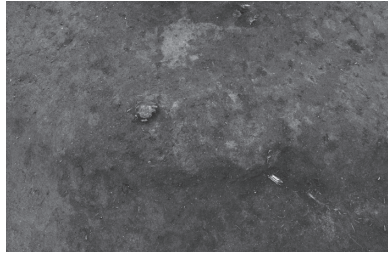
1号陥し穴検出（東から）



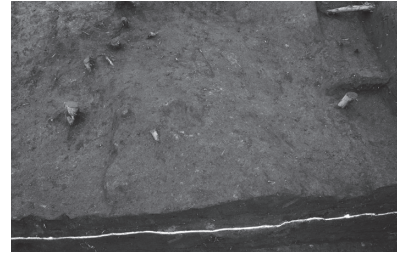
1号陥し穴断面（南から）



1号焼土平面（東から）



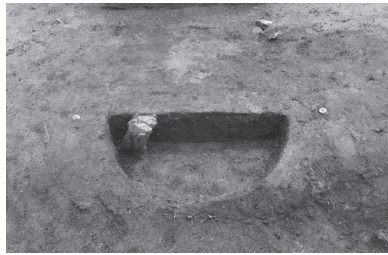
3号焼土平面（北から）



4号焼土平面（北から）



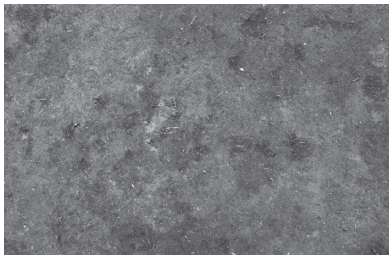
2号焼土平面（東から）



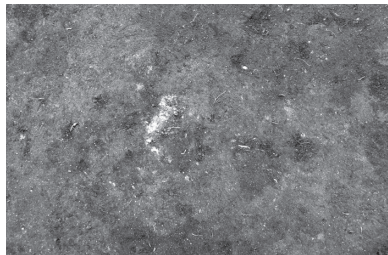
3号焼土断面（北から）



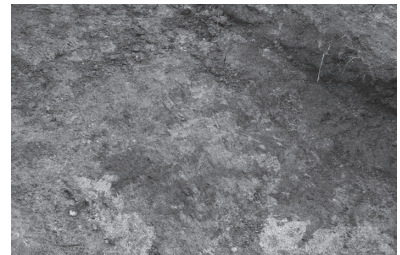
4号焼土断面（北から）



5号焼土平面（北から）



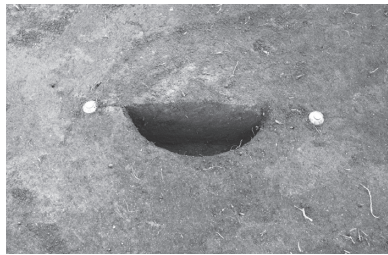
6号焼土平面（北から）



7号焼土平面（東から）



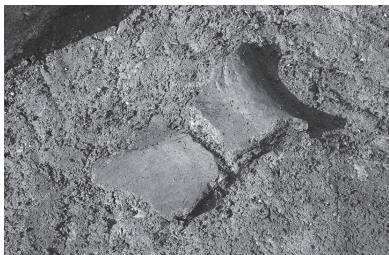
5号焼土断面（北から）



6号焼土断面（北から）



7号焼土断面（東から）



北側調査区遺構外出土遺物



北側調査区遺構外出土遺物



北側調査区調査風景



北側調査区遺構外出土遺物



北側調査区調査風景



西側調査区調査風景

写真図版 10 焼土ほか



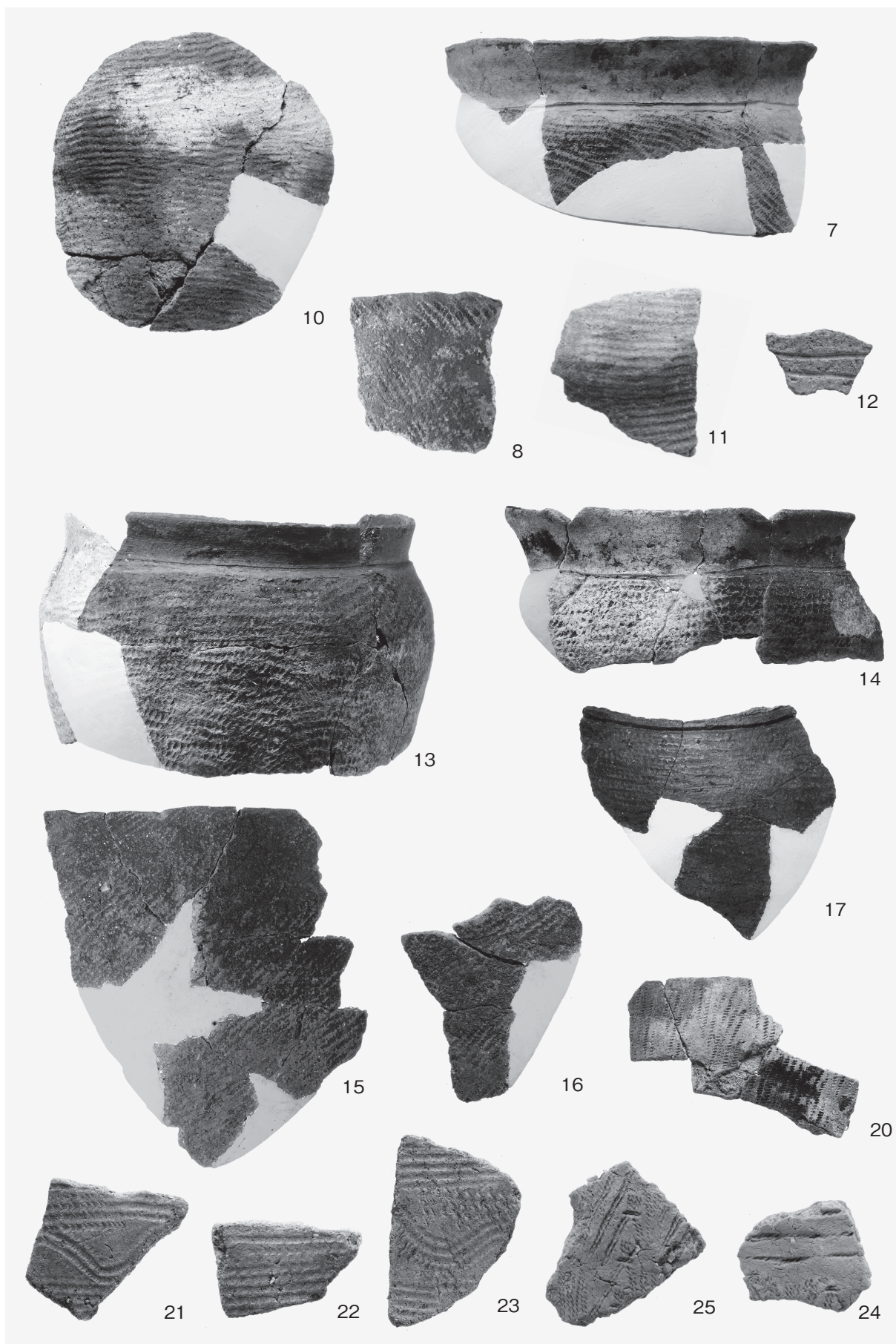
西側調査区の沢跡（東から）



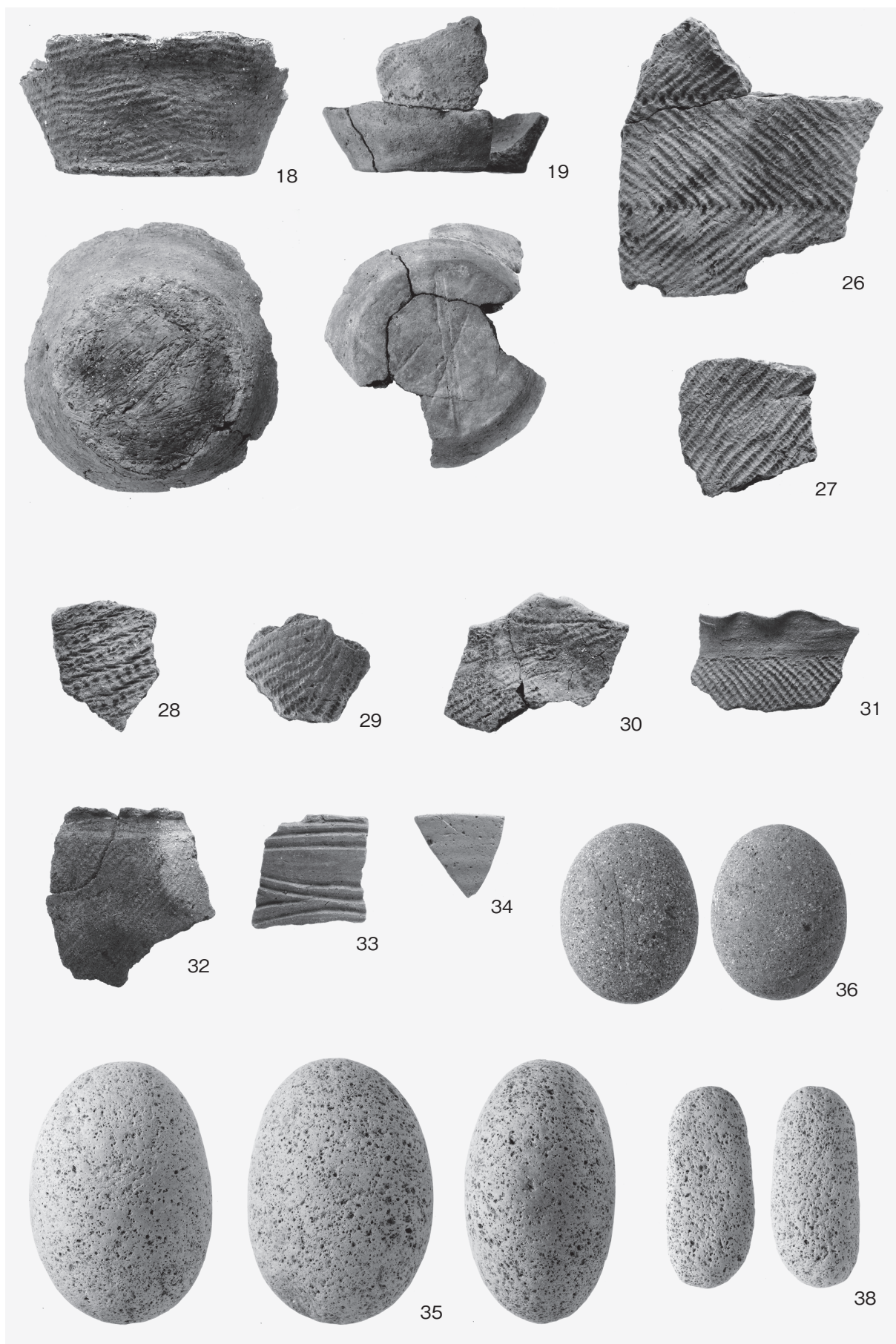
西側調査区の沢跡（東から）



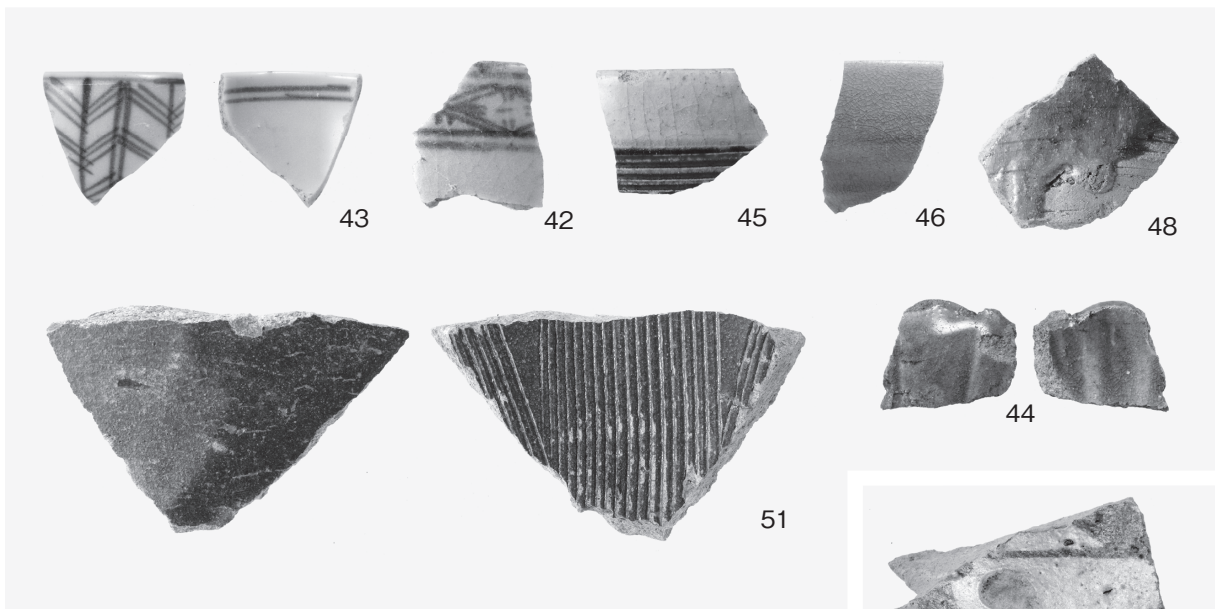
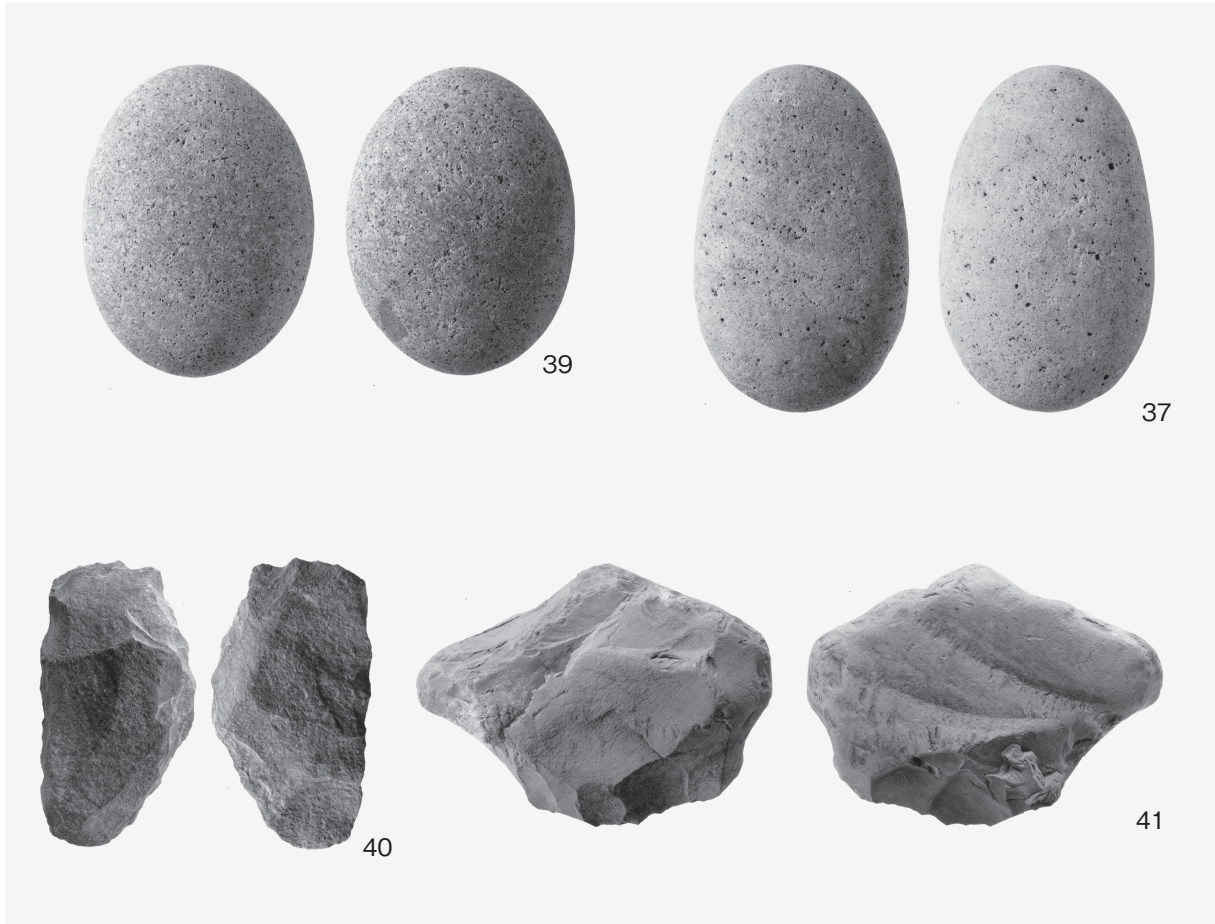
写真図版 11 出土遺物（1）ほか



写真図版 12 出土遺物 (2)



写真図版 13 出土遺物 (3)



写真図版 14 出土遺物 (4)

報告書抄録

ふりがな	さばら2いせきはつくつちょうさほうこくしよ							
書名	佐原Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名	北部環状線道路改良事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第619集							
編著者名	杉沢 昭太郎・菅野 梢・佐藤あゆみ							
編集機関	(公財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	西暦2013年3月4日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
さばら2 佐原Ⅱ遺跡	いわてけん 岩手県 みやこし 宮古市 さばら 佐原3丁目 10番1 ほか	03202	LG24-1082	39度	141度	2009.07.06 ~ 10.09	1300㎡	北部環状線道路 改良事業に係る 発掘調査
				39分	57分	2010.11.15 ~ 11.25	329㎡	
				21秒	07秒	2011.11.01 ~ 11.18	330㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
佐原Ⅱ遺跡	集 落	縄文時代	土坑 2 陥し穴 1	縄文土器・石器		弥生時代初頭		
		弥生時代	竪穴住居跡 2	弥生土器				
		不明	沢跡 2	羽口・鉄滓				
		不明	焼土 7					
要 約	<p>遺跡は複数の小規模な尾根や緩斜面に立地する。その中で遺跡西側の緩斜面には弥生時代初頭の小規模な集落が形成されていた。流れの少ない沢沿いに狭い緩斜面が広がる本遺跡のような場所が沿岸部では弥生時代初頭の稲作適地であったと推測される。その一方で存続時期が短いことも判明した。</p> <p>遺跡南側の緩斜面には小規模な沢跡があり、この中には羽口や鉄滓が含まれていた。時期特定には至っていないが、周辺に鉄生産関連の施設が想定され、この沢跡に流れ込んだものと理解される。</p>							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 619 集

佐原Ⅱ遺跡発掘調査報告書

北部環状線道路改良事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成 25 年 2 月 28 日

発行 平成 25 年 3 月 4 日

編集 (公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡 11 地割 185 番地

電話 (019)638-9001

発行 宮古市都市整備部建設課

〒027-8501 岩手県宮古市新川町 2-1

電話 (0193)68-9103

(公財)岩手県文化振興事業団

〒020-0023 岩手県盛岡市内丸 13 番 1 号

電話 (019)654-2235

印刷 株式会社五六堂印刷

〒020-0021 岩手県盛岡市中央通 3-16-15

電話 (019)654-5610

©(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2013